

# VIEW21

ビュー21

2016

Vol. 2

教育委員会版

## 第1特集

# 21世紀に 求められる力を 伸ばす

実践事例1 探究的な学習

実践事例2 プログラミング教育

## 第2特集

次期学習指導要領を見据えた  
先進的な英語の取り組み

千葉県流山市

独自の小学校英語プログラムと小中連携

奈良県天理市

オンライン英会話授業の導入

## 連載

新連載 ベネッセのデータで見るイマドキの教育  
子どもの学びや成長に影響することとは？

どう変わる？ どう備える？ 5年後の英語教育

「完璧な英語」より、生徒が  
アクティブに取り組む授業を

## 2 第1特集

## 21世紀に求められる力を伸ばす

## 3 解説

これからの社会に求められる能力をどのように捉え、どのように育むべきか

京都大学高等教育研究開発推進センター 教授 松下佳代

## 6 実践事例1 探究的な学習

探究のサイクルを繰り返すことで汎用的な力と深い知識の両方を得る

関西大学総合情報学部 教授 黒上晴夫

## 10 実践事例2 プログラミング教育

思いを形にする体験を通して、相手に伝わる論理的思考力を育む

茨城県 古河市立大和田小学校



## 13 第2特集

## 次期学習指導要領を見据えた先進的な英語の取り組み

## 14 事例1 千葉県流山市

独自の英語プログラムと小中連携の指導体制を整え、世界で活躍する人材を育てる

後田博美教育長、教育委員会、流山市立西初石中学校

## 20 事例2 奈良県天理市

オンライン英会話授業を導入。充実した英語教育で過疎地の学校の特色化を図る

森継隆教育長、教育委員会、天理市立福住小学校

## 26 VIEW'S REPORT

ファンクショナルバイリンガル育成に向けた10年の歩み

京都府・私立 立命館小学校

## 連載

## 30 小さな教委の大きな挑戦

第2回 奈良県<sup>あすか</sup>明日香村

32 ベネッセのデータで見るイマドキの教育 新連載

第1回 子どもの学びや成長に影響することとは？

## 34 どう変わる？ どう備える？ 5年後の英語教育

第2回 「完璧な英語」より、生徒がアクティブに取り組む授業を

## 36 読者のページ Reader's VIEW / 編集後記

## 第1特集

# 21世紀に 求められる力を 伸ばす

1990年代頃から、海外では資質・能力ベースで教育が論じられることが急速に広がり、各国で〈新しい能力〉に基づいた教育政策がデザインされるようになった(下図)。一方、日本でも「生きる力」や「学力の3要素」など、資質・能力を含む学力の定義が行われ、学習指導要領にも様々な影響を及ぼすようになってきている。

そこで本特集では、これまでの議論を踏まえて、今後どのように進むべきかを考察した後、今後重要視される〈新しい能力〉を身につける学習手法として、「探究的な学習」と「プログラミング教育」の2つを事例として紹介する。

### 諸外国の教育改革における資質・能力目標

OECD (DeSeCo)		EU	イギリス	オーストラリア	ニュージーランド	(アメリカほか)
キー・コンピテンシー		キー・コンピテンシー	キー・スキルと思考スキル	汎用的能力	キー・コンピテンシー	21世紀型スキル
相互作用的 道具活用力	言語、記号の活用	第1言語、外国語	コミュニケーション	リテラシー	言語・記号・テキスト を使用する能力	情報リテラシー ICTリテラシー
	知識や情報の活用	数学と科学技術の コンピテンス	数字の応用	ニューメラシー		
	技術の活用	デジタル・ コンピテンス	情報テクノロジー	ICT技術		
反省性(考える力) (協働する力) (問題解決力)		学び方の学習	思考スキル (協働する) (問題解決)	批判的・創造的 思考力	思考力	創造とイノベーション 批判的思考と問題解決 学び方の学習 コミュニケーション コラボレーション
自律的 活動力	大きな展望 人生設計と個人的 プロジェクト	進取の精神と 起業精神	問題解決 協働する	倫理的理解	自己管理能力	キャリアと生活
	権利・利害・限界 や要求の表明	社会的・市民的 コンピテンシー		個人的・社会的 能力 異文化間理解	他者とのかわり 参加と貢献	個人的・社会的責任
異質な集団 での交流力		文化的気づきと表現				シティズンシップ

基礎的  
リテラシー

認知スキル

社会スキル

\*文部科学省「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会」第6回の配付資料(国立教育政策研究所)を基に編集部で作成

# これからの社会に求められる能力をどのように捉え、どのように育むべきか

京都大学高等教育研究開発推進センター 教授 **松下佳代**

「キー・コンピテンシー」「21世紀型スキル」など、今後求められる資質・能力をまとめた〈新しい能力〉が次々と提唱され、教育現場には戸惑いも見られる。そこで、これまでの議論や潮流を整理するとともに、これらの能力を今後の教育施策にどう結びつけていくべきか、京都大学の松下佳代教授に話を聞いた。

## 〈新しい能力〉の育成は後期近代社会の世界的な課題

ここ20年ほど、教育界では様々な能力や力が提唱されてきました。私はこれらを〈新しい能力〉と総称しています。この〈新しい能力〉が出てきた背景には、後期近代社会と言われる1990年代以降の社会の変化があります。この社会の特徴として、グローバル化、情報化、流動化が挙げられます。例えば、2013年にマイケル・A・オズボーン\*1らが発表した論文「雇用の未来」では、情報化の進展に伴い、現在ある職種の約半数が10～20年後にはコンピューターに代替されると予測されています。

問題解決能力のレベル別職業群の雇用推移(図1)でも、問題解決能力が上位レベルの職業の雇用が増え

る一方で、中下位レベルでは減少し、下位レベルは横ばいとなっています。問題解決能力が中下位の人でも下位レベルの職業を求めざるを得なくなると、それらの職業の賃金が下がり、格差のさらなる拡大が懸念されます。

また、グローバル化に伴って空間的な流動化が進み、人々は国境を越えて学んだり働いたりするようになりました。時間的な流動化も進み、日本では終身雇用制が崩れ、個人が自力で人生を切り開いていかねばならなくなってきています。そうした変化が進展する後期近代社会においては、〈新しい能力〉の育成が世界的な課題となっているのです。

〈新しい能力〉はいろいろ提唱されていますが、3つの特徴があります。

1つは、対象の年齢や範囲の広さです。〈新しい能力〉の対象は小学生から成人まで広が

り、また、OECDのPISA\*2 2012年調査には、世界経済の8割以上をカバーする65か国・地域が参加するまでになっています。

能力の中身の広さも特徴です。〈新しい能力〉には、知識・技能などの認知的側面にとどまらず、対

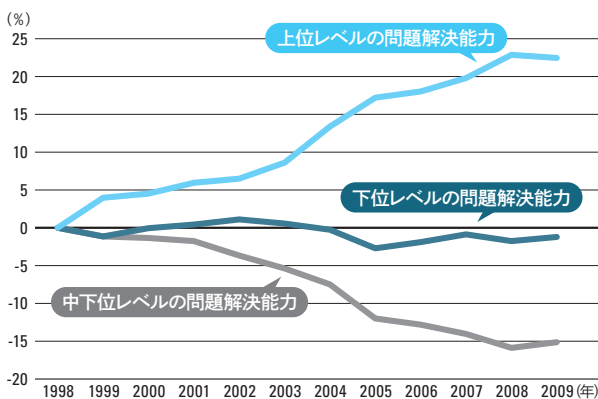


まつした・かよ 京都大学大学院教育学研究科博士後期課程退学。博士(教育学)。群馬大学教育学部助教授、京都大学高等教育教授システム開発センター助教授を経て、2004年より現職。専門分野は、教育方法学(能力論、学習論、評価論)、大学教育学。主な著書に、『〈新しい能力〉は教育を変えるか』(編著、ミネルヴァ書房)、『ディープ・アクティブラーニング』(編著、勁草書房)など。

人関係などの社会的側面や、態度などの情動的側面も含まれます。

3つめの特徴は、単に教育目標として掲げられるだけでなく、評価対象にもされるようになったということです。例えば、前述のPISA調査は、世界各国の教育政策に大きな影響を与えています。日本もそうですが、〈新しい能力〉を何らかの形で教育目標として設定し、評価の対象としている国・地域は多く、それらの国・地域では、学校段階を問わず、その育

図1 問題解決能力のレベル別職業群の雇用推移



出典/文部科学省「2030年に向けた教育の在り方に関する第2回日本・OECD政策対話(報告)」

\*1 イギリス・オックスフォード大学の准教授。同大学のカール・ベネディクト・フレイ氏との共著で2013年に「THE FUTURE OF EMPLOYMENT(雇用の未来)」を発表した。  
\*2 Programme for International Student Assessmentの略。国際的な学習到達度調査のこと。

成に力を注いでいます。

## 〈新しい能力〉を どのように捉えればよいか

様々な〈新しい能力〉が提唱される中、どのような能力を、どのように育成すべきなのでしょう。

日本でこれから求められる力としてよく取り上げられるのが、学校教育法で定義された「学力の3要素」です。このうち、「思考力・判断力・表現力」は、PISAリテラシーの影響を強く受けて取り入れられました。また、「主体的に学習に取り組む態度」は、中央教育審議会の高次接続改革の答申などでは「主体性・多様性・協働性」と表現されていますが、いずれも背景には〈新しい能力〉において情意的・社会的側面を重視しているということがあります。

「学力の3要素」は、OECDが進める「Education2030プロジェクト」での能力概念と共通する部分が多く

(図2)、文部科学省も理論的な裏付けとして用いています。この概念は、「知識」「スキル」「人間性」の3つと、自分の学びをどう省察し学び続けるかという「メタ学習」で構成されます。「スキル」には、算数の筆算のような教科に特化した技能ではなく、創造性やコミュニケーション力、協働性などが含まれています。

もう1つ注目したいのが、OECD-DeSeCo<sup>\*1</sup>の「キー・コンピテンシー」です。これは、「相互作用的に道具を用いる(対象世界との関係)」「異質な集団で交流する(他者との関係)」「自律的に活動する(自己との関係)」の3つのカテゴリーで構成され、コンピテンシーの核心には「思慮深さ」があると考えられています(図3)。

キー・コンピテンシーが「能力を育てる関係性」に着目しているのに対し、「Education2030プロジェクト」の能力概念は「育てたい能力に包摂される人間の属性」に焦点を

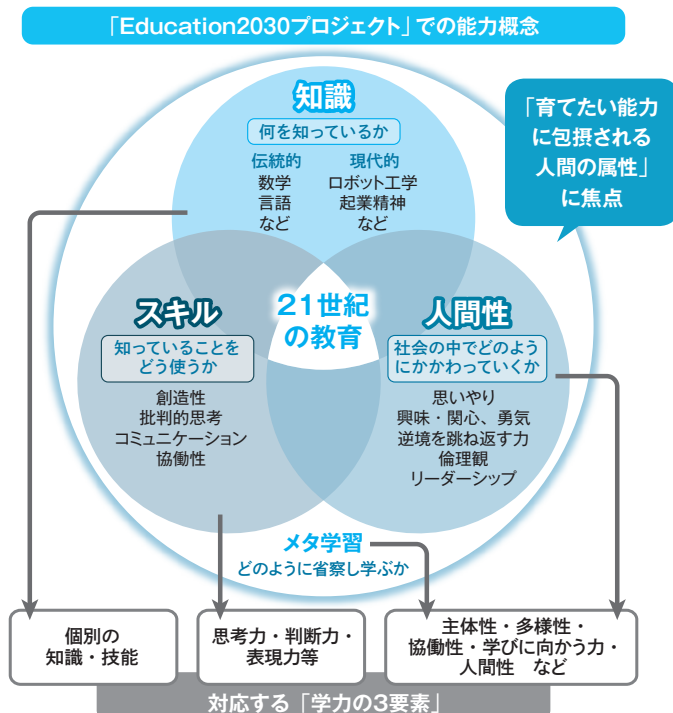
当てています。両者は別々のものであり、前者を「3軸」(他者・自己・対象世界)、後者を「3次元」(知識・スキル・人間性)と捉え、そこに「思慮深さ」や「メタ学習」が加わると考えるとよいでしょう。

さらに、能力を考える上で欠かせない視点が、「普遍性」と「時代性」です。いつの時代も変わらずに求められる能力がある一方で、時代にに応じて求められる能力もあります。

「3軸×3次元+メタ学習」に「普遍性と時代性」の視点を併せ持つことで、〈新しい能力〉がそれぞれ何を重視しているかを捉えやすくなると思います。例えば、ATC21S<sup>\*2</sup>が提唱する「21世紀型スキル」は、ICTリテラシーなど時代性がより強調された〈新しい能力〉であると言えます。

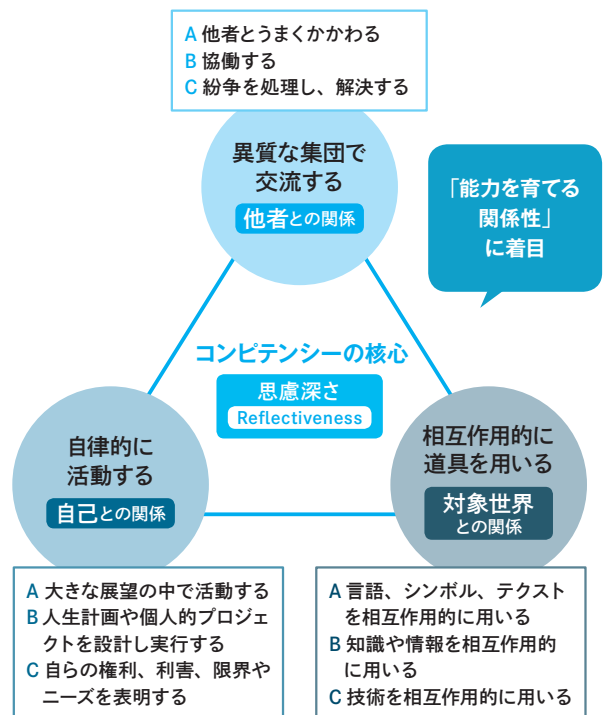
このような視点で学校の教育観や教師自身の指導観を振り返ることで、教育活動の特色や課題に気づきやすくなるのではないのでしょうか。そし

図2 「Education2030プロジェクト」での能力概念と「学力の3要素」の重なり



\*中央教育審議会 教育課程企画特別部会 論点整理 補足資料を基に編集部で加筆して作成

図3 OECD-DeSeCoの「キー・コンピテンシー」



\*国立教育政策研究所「キー・コンピテンシーの生涯学習政策指標としての活用可能性に関する調査研究」を基に編集部で加筆して作成

\*1 DeSeCoは「デセコ」という。コンピテンシーを国際的・学際的かつ政策指向的に研究するため、OECDが組織したプロジェクト。1997～2003年に活動。

\*2 Assessment and Teaching of 21st Century Skillsの略。2009年、世界中の研究者、政府、国際機関が立ち上げた国際団体。4つの分野に分けて10のスキルを提唱した。

て、「今後はこの能力の育成にもっと力を入れよう」「この能力はこの活動で育てよう」など、育てたい能力を整理しやすくなるはずです。

### 〈新しい能力〉が育つ アクティブ・ラーニングとは

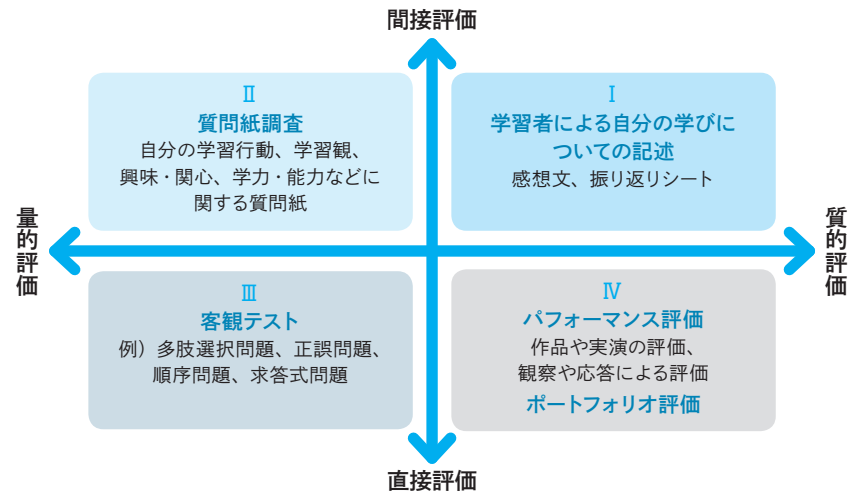
そうした〈新しい能力〉の育成に向けて推奨されているのが、**アクティブ・ラーニング**（以下、AL）です。従来、小学校では実践が比較的進んでいましたが、中学校や高校、とりわけ進学校では入試対策を理由に導入が遅れていました。しかし、〈新しい能力〉の評価を組み込んだ大学入試改革は、その状況を変えつつあります。

ALを導入する際、「3軸×3次元+メタ学習」「普遍性と時代性」の視点と照合すると、各活動がどのような能力の育成につながるのかが分かりやすくなります。ALでは、表現力や協働性など、汎用的な力の育成と知識・技能の習得をどう両立させるかが重要です。

ペアワークやグループワークといった協働学習、「書く」「話す」といった表現活動をさせればよいという、形だけのALに陥らないように注意する必要があります。大切なのは「深い学び」「対話的な学び」「主体的な学び」を行うことだからです。

例えば、「深い学び」を行うためには、事実に知識だけでなく、その根底にあって、ほかの事例でも使えるような概念や原理を理解し、一般化することが大切です。一例を挙げると、ある中学1年生の国語の授業では、中原中也の作品を題材として、初めに教員主導の授業で修辞法の内容や詩を読み解くポイントを学びました。続いて、修辞法の知識を生かして、グループで自校の校歌を分析する活動に取り組み、クラス全体で意見を

図4 学習評価の構図



\*松下教授提供資料を基に編集部で作成

共有。最後に、各自で生徒歌の修辞法の内容を分析するという課題を提示して、授業は終了しました。学習した内容を2つの素材へ応用することで、より深い理解につなげることができました。

「ALを行うと時間が足りなくなる」という悩みをよく聞きます。反転学習を取り入れたり、タブレットなどのICTツールを活用したりといった方法も考えられますが、事実上の知識と概念や原理のメリハリをつけることが、まず前提になります。

〈新しい能力〉の育成にあたっては、評価も大切なポイントです（図4）。現状では、客観テストや質問紙調査などに偏りがちですが、本当に授業を変えるのであれば、内容を深く理解できているか、知識を使う能力が育っているかを評価できるように、「直接・質的評価」であるパフォーマンス評価やポートフォリオ評価などを取り入れることが理想です。

### 特別活動や課外活動も含め 教育活動全体での育成を

〈新しい能力〉を、授業だけでなく、教育活動全体でいかに育てるかという視点も重要です。とはいえ、〈新し

い能力〉を育てるために新しく活動を始めなければならないかということではなく、既存の活動でも〈新しい能力〉を育てる場になり得ます。例えば、主体性や協働性、リーダーシップなど〈新しい能力〉で重視されているものを、部活動などを通じて身につけてきた生徒は少なくないのではないでしょうか。そのように、学校行事や生徒会活動、部活動など、あらゆる教育活動で育成したい能力を検討してみてください。教育活動全体で育てるためには、個々の教員に委ねるのではなく、学校として学びの仕組みをつくったり、場を提供したりする必要もあるでしょう。

〈新しい能力〉の育成について、個々の学校、教員一人ひとりで考えるのは難しいものです。教育委員会が大まかな方針を示した上で、地域の学校が共通して取り組むことと、学校が個々に取り組むことを、うまく切り分けるとよいと思います。一方で、活動の推進にあたっては、学校や教員の主体性が大切です。教育委員会は、リソースを準備したり、学校間で成功・失敗事例を共有する仕組みをつくったりすることが、現場の支えとなるのではないのでしょうか。

# 探究のサイクルを繰り返すことで 汎用的な力と深い知識の両方を得る

関西大学総合情報学部 教授 黒上晴夫

思考力や課題発見・解決力など、これからの社会で求められる力を育むための学習活動として、探究的な学習の導入が進んでいる。ここでは、主に「総合的な学習の時間」において、より質の高い探究的な学習を展開するための工夫点や注意点について、関西大学の黒上晴夫教授に話を聞いた。

## 「探究的な学習」とは？

### 自ら課題を設定し、探究後の振り返りにより、課題を更新

現行の学習指導要領では、「総合的な学習の時間」（以下、総合学習）を中心に、探究的な学習を重視することが打ち出された。教科学習では、学習の重要なプロセスとして、習得・活用・探究を意識して行うことが提起され、さらに、総合学習には、単なる体験の場で終わらせるのではな



くろかみ・はるお 大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程単位取得退学。大阪大学助手、金沢大学助教授を経て、現職。専門分野は教育工学。中央教育審議会教育課程部会「生活・総合的な学習の時間ワーキンググループ」の委員等を務める。主な著書に「こうすれば考える力がつく！ 中学校思考ツール」『考えるってこういうことか！「思考ツール」の授業』（ともに小学館）など。

く、活動の内容を教科学習と結びつけ、子どもが主体的に学ぶ場として充実させることが求められた。

黒上教授は、「授業の中に探究的な学習を取り入れるという考え方そのものは、決して新しくはない」と語る。これまでも社会科や理科の授業などで、探究的な学習は行われてきた。では、今、重要度が高まっている探究的な学習とは、具体的にどのようなものなのか。

「大きな特徴の1つは、**児童・生徒自身が課題の設定を行う**ことです。そして、設定した課題に基づいて情報を集め、それらを整理・分析して課題の解決案を自分の意見としてまとめ、文章や口頭で表現します。この表現したものに対する他者からの質問や意見、あるいは自身の振り返りをきっかけにして、新たな疑問や問題意識が発生します。その疑問や問題意識を基に新たな課題を設定し、また、情報収集や整理・分析に取り組んでいく。そのように、**自らの考えや課題を更新し、探究のサイクルをらせん状に繰り返していく**ことを、探究的な学習では目指しているのです（図1）」（黒上教授）

## なぜ「探究」なのか？

### 汎用的な力だけでなく 教科学力も身につく

前述のように、探究的な学習では、

図1の①～⑤のサイクルを発展的に繰り返していく。

例えば、宮城県仙台市のある小学校では、総合学習において、「米作り」をテーマに児童が1年間かけて探究的な活動を行った。最初に取り組んだのは、農家が行う米作りの工夫を調べることだった。分かったことをまとめて発表した段階で、「米の収穫量を増やすために、農薬を使うのは良いことか」など、子どもたちの中に新たな疑問が湧いてきた。そこで、次はその疑問を課題にして、新たな探究活動に取り組んだ。

こうした一連のプロセスを体験する中で、課題発見・解決力、情報収集力、論理的思考力、コミュニケーション力、表現力など、汎用的な力を高めることが期待できる。そして、それらの力は、小・中・高と連続して何度も繰り返し行うことで転移（＝習得）され、高められていく。

また、探究を繰り返すことによって、子どもたちは教科書で学ぶ以上に米作りへの理解が深まり、かつ知識量も膨大になったという。

実際、文部科学省「全国学力・学習状況調査」の結果を見ると、総合学習において、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいる子どもほど、各教科の正答率が高く、かつ、知識を問うA問題、

知識活用力を問うB問題ともに高いという結果が出ている(図2)。

「探究的な学習では、情報収集や分析、他者との話し合い、発表などのプロセスの中で、知識を何度も扱い、ほかの知識と関連づけて考えることで、理解が深まったり、知識が構造化されたりして定着し、その活用力も高まったと考えられます。また、自ら課題を設定して探究的な学習に取り組むことで、自己学習力が身についたことも、学力調査の成績を押し上げる要因になっているのではないでしょうか(黒上教授)

「探究的な学習」の実践方法

課題設定や整理・分析の手がかりを子どもに与える

次に、探究的な学習を効果的に進めるための工夫についてみていこう。

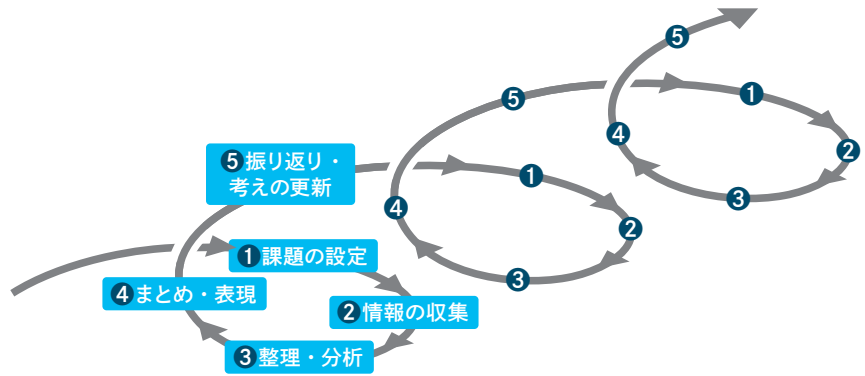
① 課題の設定

ここでは、まず、子どもが取り組みたい課題を自ら見いだせるよう、教員がいかにかの疑問や問題意識を触発するかが鍵となる。

「有効な手法は、実生活や実社会の中で起きている事象を取り上げ、『本来はどうあるべきか。でも、現状はどうなっているか』と、子どもたちに問いかけることです。例えば、時間(例:以前はこうだったが、今はこうだ)、空間(例:欧米ではこうだが、日本ではこうだ)、違和感(例:常識だとされているが、本当にそうか)という『3つのカン』を手がかりにして考えると、見つけやすいと思います。そうすることで、子どもたちはギャップに気づき、疑問や問題意識が湧いてくるでしょう。それを課題とするのです(黒上教授)

「質問・疑問マトリクス」(P.8図3)を活用する方法もある。例えば、「地球温暖化」をテーマに、マトリクスを使って疑問を出したところ、あ

図1 探究的な学習における学習の進め方

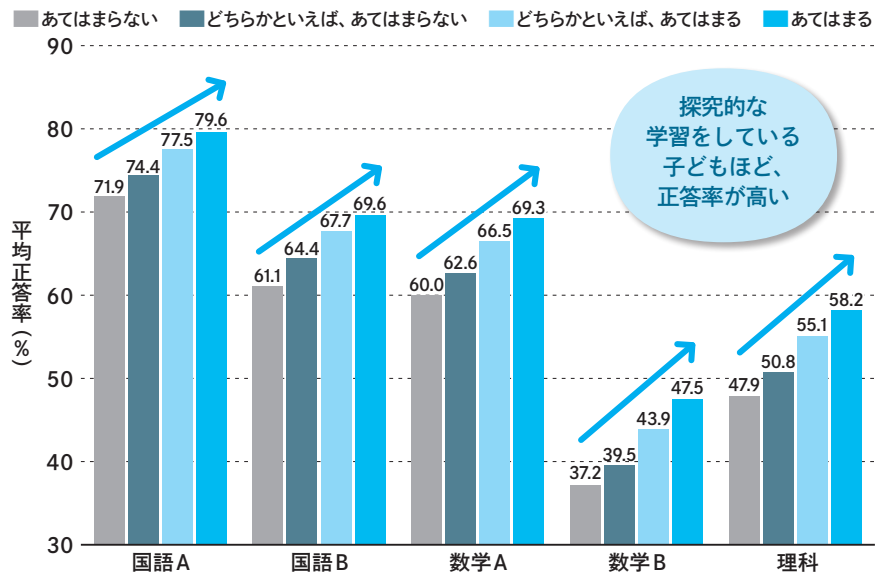


① 課題の設定	現状と目標とのギャップを捉え、課題意識を持つ、課題点を見いだす。
② 情報の収集	必要な情報を取り出したり、収集したりする。設定された課題に対し、解決プロセスを決定し、必要な情報は何かを考えたり、情報収集を行ったりする。
③ 整理・分析	問題解決を見通して情報を処理する。多様な手法で収集した情報を構造化・可視化し、多様な視点から分析する。
④ まとめ・表現	結論・主張の伝え方を吟味し、他者に伝えたり、議論したりする。
⑤ 振り返り・考えの更新	まとめ表現したもの(成果)について、グループ・各自で何ができていて・何ができていないかを把握するとともに、その間のプロセスについても検証し、次に向けて新たな課題を生み出す。

\*「中学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編」と「未来を拓く『探究』導入編」(ベネッセより刊行→P.9参照)を基に編集部で作成

図2 「総合的な学習の時間」に取り組む姿勢と教科学力との関係(中学生)

Q.「総合的な学習の時間」では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか。



上図は中学校の結果だが、小学校でも同様の結果が得られている。出典/文部科学省「平成27年度 全国学力・学習状況調査」結果より

る生徒が「理由」-「意図」が交差するマス目に、「なぜ温暖化対策に消極的な国があるのか」と書き込んだとすると、その疑問が、そのまま、あるいは他の疑問と組み合わせられて、

探究的な学習の課題になるのだ。

② 情報の収集

「情報の収集」の方法には、書籍やインターネットでの調べ学習、実験や観察、インタビューやアンケート

調査などがある。その際に重要なのは、課題の分析やまとめを行う上でどのような情報が必要になるのかを、あらかじめ見当をつけてから情報収集することだ。そうすれば、設定した課題そのものに関する情報だけでなく、関連する情報にまで目が向き、収集すべき情報を取捨選択するという情報収集力が鍛えられていく。

### ③整理・分析

たくさん集めた情報を、課題解決に向けて整理し、分析することにもコツがあると、黒上教授は説明する。

「何の視点も与えないままでは、子どもはどのように考えればよいかが分かりません。思考を可視化するためには、教員が『なぜそうなった

のか、順序立てて考えてみよう』『AとBを比較して考えてみよう』など、考えるための具体的な方法を提示する必要があります。これを私は『思考スキル』(図4)と呼んでいます」

場面に応じて、ここではどの思考スキルを使うべきかを、子ども自身に考えさせてから取り組ませる。それを繰り返すことで、思考力の働かせ方を習得するとともに、収集した情報を適切に「整理・分析」することが可能になるのだ。

また、ベン図や座標軸、チャート、マトリクスなどの「シンキングツール」(図5)を活用することも、調べたことや考えたことを整理・分析する上では有効だ。これらは、子ども

が話し合いながら書き込めるため、協働学習での活用にも向いている。

### ④まとめ・表現、⑤振り返り・考えの更新

「まとめ・表現」では、単にまとめて発表するだけでなく、子どもに「達成できたこと」や「解決できなかった課題」などについて、振り返りの機会を設けることも重要だ。「この部分については十分に考えられていなかった」「このテーマについては、ほかにもこんな課題がある」といった気づきが、自らの考えや課題を新たにし、探究の過程を繰り返していくことにつながる。

#### 教育委員会の役割①

#### 研修を通して意識改革を行い、導入のハードルを下げる

黒上教授は、「教員が探究的な学習のねらいを十分に理解した上で、実際に探究的な学習のサイクルを回せるようになるためには、教育委員会のサポートが不可欠」と語る。

まず行うべきは、教員の意識改革だろう。現中学2年生が高校3年生となる2020年度には、「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」で思考力・判断力・表現力を測る記述式問題が導入予定で、多面的・総合的に評価する入試も増える見込みだ。また、現小学4年生が高校に入学する2022年度には、高校に理科と数学にまたがって探究活動を行う科目「理数探究」が新設される見通しだ。

「大学入試改革や学習指導要領改訂の動きを押さえ、探究的な学習の充実は必然的な流れであることを教員に説明した上で、その実践方法を研修などで伝えて、導入のハードルを下げるのが大切です」(黒上教授)

子どもが探究的な学習に取り組みやすくするためには、考える手がかかりやツールを与える必要がある。

「そのためには、まず教員自身が

図3 質問・疑問マトリクス

	What 何が?	When & Where いつ・どこで?	Which どれが?	Who だれが?	Why なぜ?	How どのように?
	事項	状況	選択	人	理由	手段
現在	～は何か?	いつ・どこで?	どれが?	だれが? だれに?	なぜ?	どのように?
過去	何が ～したか?	いつ・どこで ～したか?	どれが ～したか?	だれが(に) ～したか?	なぜ ～したか?	どのように ～したか?
意図	何を～たい/ たかったか?	いつ・どこで ～たい/た かったか?	どれを～たい /たかった か?	だれに～たい /たかった か?	なぜ～たい/ たかったか?	どのように ～たい/た かったか?
可能性	何がありえる /たか?	いつ・どこで ありえる/た か?	どれがありえる /たか?	だれが(に) ～しえる/た か?	なぜ～しえる /たか?	どのように ～しえる/た か?
予想	何が～しそ うか?	いつ・どこで ～しそ うか?	どれが～しそ うか?	だれなら(に) ～しそ うか?	なぜ～しそ うか?	どのように ～しそ うか?
仮定	もし～が起 こったらどう なる/な ったか?	もし[いつ・ どこで]起 こたらどう なる/な ったか?	もし～を選 んだらどう なる/な ったか?	もし～なら どうなる/な ったか?	もし～が理 由ならどう なる/な ったか?	もし～のよ うになら たらどう なる/な ったか?

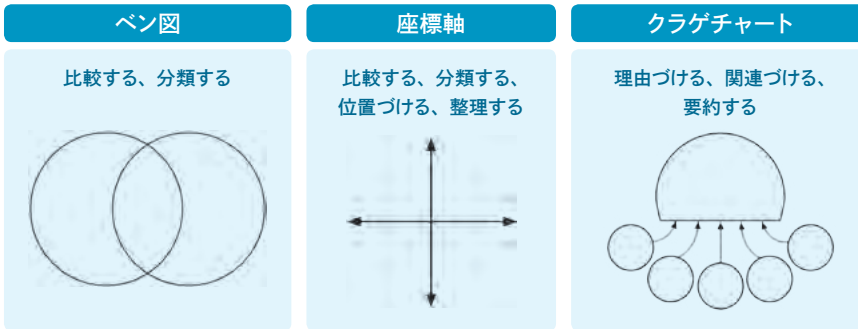
「可能性」と「予想」はよく似ているが、可能性=ありえるものを考える(実際には起こらなくてもよい)、予想=実際に起こりそうな予測を考えるという点が異なる。 \*黒上教授提供資料を基に編集部で作成

図4 教科横断的な思考スキル

順序立てる	つなげる	あてはめる	推論する	要約する
比較する	関連づける	変換する	具体化する	分析する
焦点化する	多面的にみる	変化をとらえる	抽象化する	評価する
分類する	広げる	見通す	構造化する	俯瞰する

\*黒上教授提供資料を基に編集部で作成

図5 シンキングツールの例



\*黒上教授提供資料を基に編集部で作成

ツールの存在を知り、場面に応じて子どもに提示できるよう、教育委員会が、研修などを通じて、ツールの考え方や使い方を指導する必要があります。使い方を知れば試してみようという教員が現れ、そこから他の教員へ浸透していくことが期待できます。実際にツールの活用が活発な地域を見ると、教育委員会が積極的に研修を行っています」(黒上教授)

### 教育委員会の役割②

#### 現場がルーブリックを作り、評価方法を鍛えていく

探究的な学習では、「児童・生徒の学習状況をどう評価していくか」という評価方法に関する課題もある。

「基本的には、子どもが探究的な学習に取り組む時の態度と、その変化を観察した結果の評価が中心となります。ですから、教員の主観的な評価に陥らないよう、ルーブリックなどを用意し、評価基準を明確にしておくことが大切です。教育委員会は、ルーブリックの作り方や、それをを用いた評価方法についての研修も行う必要があります」(黒上教授)

ここでの注意点は、ルーブリックを教育委員会や学校単位ではなく、授業を担当する教員自身が作成するということだ。授業を直接担当していない者がルーブリックを作成すると、どうしても抽象的になり、現場

の教員には使いにくく、子どもにとっても学習のめあてとして分かりにくくなってしまふからだ。

現場の教員に作成を任せるからこそ研修が重要になるわけだが、研修だけでルーブリックの作成方法や評価方法が身につくわけではない。

「ルーブリックの作成は、最初のうちは大変です。例えば、『自分の意見を言えるようになる』だけでは、評価基準を設定したとは言えません。『根拠を示しながら、自分の意見を言えるようになる』というように、表現をより具体的に落とし込まないと、子どもの学習状況を評価することは難しいでしょう。そのような力は、現場で実践を繰り返す中で鍛えていくしかありません」(黒上教授)

### 教育委員会の役割③

#### 授業研究やワークショップで指導の質を高める

探究的な学習に関する教員の指導力を高めるためには、各校への働き

かけも大切だと、黒上教授は言う。

「教員間で指導ノウハウを共有し、指導力を高める方法としては、教員が互いに授業を見合って意見を交換する授業研究が効果的です。ところが、中学校や高校は教科担任制の壁もあり、教科間の授業研究は必ずしも活発とは言えません。しかし、教科の専門的な内容には踏み込めなくても、生徒の思考力・判断力・表現力を伸ばす活動ができていくかといった観点であれば、教科の壁を超えた意見交換が可能はずです」

探究的な学習を進める上では、各校が持つ人材や施設などのリソースを確認し、共有することも大切です。

「学区内で活用できそうな施設や、協力を要請することが可能な人脈などを洗い出しておくといでしょう。そして、それらのリソースを活用して、どのようなテーマが設定できるか、どういった活動の流れが可能になるか、子どもたちがどのような学びを得ることができるか、といったことを教員同士でディスカッションすることも大切です。そうした大きな活動の流れを、ワークショップなどを通して体験させることが望ましいと思います」(黒上教授)

前述のように、探究的な学習は、次期学習指導要領や大学入試改革においてますます重要視されていく。教育委員会も学校現場も、探究的な学習の意義を理解し、進んでこれに取り組んでいくことが求められる。

#### 「探究的な学習」導入のヒント満載の情報誌

#### 『未来を拓く「探究」導入編』(無料)をご用意しました!

探究的な学習を「総合的な学習の時間」だけでなく、教科の授業や部活動など、学校の教育活動全体で取り入れていくためにはどうすればよいか、さらには、課題設定をどのようにすればよいか、など、実践のヒントと具体的な指導事例(「質問・疑問マトリクス」ワークシートの実例など)をまとめた教員向け無料情報誌です。ご興味のあるかたは、以下までお問い合わせください。

◎問い合わせ先 お客様サービスセンター：フリーダイヤル 0120-350455

◎受付時間 月～金 8:00～19:00 / 土 8:00～17:00 (祝日・年末年始除く)

#### \*黒上教授監修!



# 思いを形にする体験を通して、相手に伝わる論理的思考力を育む

## 茨城県 古河市立大和田小学校

次期学習指導要領では、小学校での必修化も検討されているプログラミング教育。

古河市立大和田小学校では、2015年度から文部科学省の実証校としてその実践に力を注いでいる。

同校が進めるプログラミング教育は、どのような力や姿勢の向上につながっているのか、子どもの変容する姿を見ていく。



◎ 1876（明治9）年開校。2015年度から、文部科学省「情報教育指導力向上支援事業」のプログラミング教育実証校。タブレットPCや電子黒板などのICT機器を活用し、「分かる・できる」授業の実践に努めている。

校長 向原正博先生

児童数 80人

学級数 8学級（うち特別支援学級2）

電話 0280-76-0040

URL <http://owada.koga.ed.jp/>

にはプログラミング教育の経験がなかったことから、2015年度は指導案検討の段階からベネッセ教育総合研究所とEdTech Lab\*<sup>2</sup>に協力を依頼し、2015年11・12月には、全学年で公開授業を行った（図1）。このうち、4年生の算数の事例を紹介する。

### 背景

#### 自分の思いを分かりやすく伝える力を育みたい

古河市は、2015年9月、すべての市立小・中学校にタブレットPCを導入した。特に、重点整備校である古河市立大和田小学校には、児童1人に1台、計80台を配備した。

農村地帯にある同校は、市内でいちばんの小規模校で、子どもたちには自分の考えや思いを伝える力がやや弱い傾向が見られた。そこで、2014年度から、国語の授業で、根拠を明確にした上で友だちと意見交換をし、自分の考えを深めていくという言語活動を進めてきた。

しかし、子どもには発表することが恥ずかしいという意識が根強く残っていたため、自分の思いを伝えるツールとしてタブレットPCを活用し、積極的に自分を表現する力の育成につなげたいと考えた。そこで、同校では、毎日の授業で発表資料の

作成や調べ学習、ドリル学習などにタブレットPCを積極的に活用。さらに、文部科学省「情報教育指導力向上支援事業」実証校としてプログラミング教育にも力を入れている。向原正博校長は次のように説明する。

「思考を可視化して相手に分かりやすく伝える活動を、プログラミング教育を通して行うことで、表現力と論理的な思考力の2つを育むことをねらいとしています。今も昔も理系の人材へのニーズは高いですが、その要因の1つは論理的思考力が備わっているからではないでしょうか。小学校時代から論理的思考力を育てることは、子どもの将来に大きなプラスになると考えています」

プログラミング教育で使用するソフトウェアとして、子ども向けに開発された「Scratch Jr（スクラッチジュニア）」\*<sup>1</sup>を採用。教員

### 実践

#### 式から文章題を作成しアニメーションで表現する

課題は、「式と計算」の単元のまとめとして「式」から文章題を作成して、「Scratch Jr」を使ってその場面を30秒程度の動きで表現すること。単なるアニメ化ではなく、相手に伝える場面を想定しながら作ることで、考える意欲を高め、イメージ豊かに文章題を考えさせることをねらいとした。

授業の最初に、教員が作成した見本を見せ、完成イメージを持たせてから、数式を基に児童一人ひとりに文章題を考えさせた（図2）。次に、その問題を4つのステージに分けて、

図1 プログラミング教育での各学年の実践例

#### 2015年11・12月実施の公開授業の内容

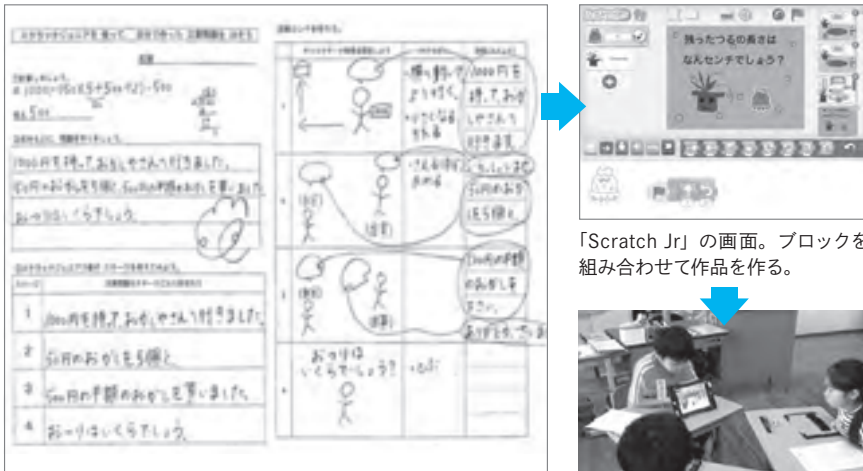
1年生	相手を喜ばせるために、動くメッセージカードを作ろう
2年生	動く楽しい絵本を作って、1年生に紹介しよう
3年生	自分で作成した木工作品が活躍する物語を作ろう
4年生	式から文章題を作り、分かりやすくプログラムに表そう
5年生	ボール型デバイスで来年の新入生に学校紹介をしよう
6年生	ボール型デバイスでムービングイルミネーションを作ろう

\* 大和田小学校提供資料を基に編集部で作成

\* 1 アメリカ・マサチューセッツ工科大学で開発された「Scratch（スクラッチ）」というプログラミングアプリケーションの幼児版。「Scratch」は8歳以上、「Scratch Jr」は5～7歳を対象としている。

\* 2 ベネッセホールディングスに所属する、テクノロジーを用いて学びを革新するための研究開発部門。

図2 4年生の算数 プログラミングのワークシートと操作の様子



4年生のプログラミング教育で使ったプログラム作成用のワークシート。場面を4つのステージに分け、子どもが論理的に考えながら作品を作れるようにしている。

\*大和田小学校提供資料をそのまま掲載

\*画像は、©Scratch Foundation Scratch Jr

「Scratch Jr」の画面。ブロックを組み合わせて作品を作る。



自分で作った作品をグループ内で見せ合い、改善点などを話し合う。

絵コンテを作成。これは、考えや構成を整理するために欠かせないプロセスだ。当時4年生担任だった藤原晴佳先生は、次のように話す。

「絵コンテなしでプログラミングをしていた時は、思考がまとまらず、時間内に完成できない子どもが多数いました。絵コンテ作りを通して、必要な要素を確認し、伝え方を順序立てて考え、場面の構成を明確にイメージすることができます」

続いて、プログラミングを行う。このソフトでは、文字入力ではなく、アイコンのようなブロックを組み合わせる（図2）。直感的に操作でき、子どもでも扱いやすい。

「操作方法を教えると、どの子どももすぐに試して、自力で操作できるようになりました」（藤原先生）

プログラミングは3人1組で行った。グループごとに割り当てられた数式を基に、グループ内で各自が文章題を作り、発表し合った（図2）。

「算数は得意・不得意の差が大きいいため、子ども同士で考えを出し合い、高め合ってほしいと考えました。そのねらい通り、子どもたちは画面を

見せ合いながら作業を進め、『この言葉が入っていない』『動きが速すぎて分かりにくい』など、自然と協働する姿が生まれました」（藤原先生）

グループ内で作品ができ上がると、数式が異なる他グループと作品を見せ合った。見た人が正しく式を立てて答えられたら、その作品は意図を正確に伝えられたことになる。最後に、授業の振り返りをして終了した。

見本作りなど、教員の授業準備にはそれなりに時間がかかったが、負担感はそれほどなかったという。

## 成果

### 論理的思考力だけでなく 協働性や表現力も育む

このように、授業の中で自分の思いが形になり、誰かに伝わったという体験が、子どもたちの自信につながり、様々な力を高めているようだ。

「相手に伝わる作品にするためには、必要な要素を筋道を立てて説明する力が欠かせません。それを考える過程が、論理的な思考力の育成につながったと思います」（藤原先生）

当初、子どもたちは絵コンテ作り

に20～30分を要したが、何度も繰り返すうちに5分程度でできるようになった。そうした変化からも、考えを整理して構成する力の高まりがうかがえる。研究主任の鈴木季加先生は、次のように説明する。

「例えば、始業式のスピーチの際、以前は事前に準備した作文を読み上げるだけでしたが、今ではキーワードのメモを見て自分の言葉で話せるようになりつつあります。これも、頭の中で話を整理して構成する力がついてきた表れだと捉えています」

作品作りでは、より分かりやすかったり、見る人を楽しませようとしたりと、演出をする子どもが多かった。そうした姿勢は、表現力や想像力の向上につながると考えている。

プログラミングの授業では、協働作業を多く取り入れることも意識している。4年生のアンケートでは、「友だちの作品を見たり、友だちと話し合ったりすると、新しい考えを思いつきますか」という質問に、90%の子どもが肯定的に答えるなど、子



校長

**向原正博**

むこはら・まさひろ

モットーは、「休み時間などに子どもと一緒に遊び、小さな思いや悩みにも耳を傾ける」



教諭

**鈴木季加**

すずき・きか

研究主任。4学年担任。モットーは、「子どもが生き生きと思いや考えを伝え合う全員参加の授業を目指す」



教諭

**藤原晴佳**

ふじわら・はるか

現在は3学年担任。モットーは、「子どもの小さなよいところを認め、笑顔あふれる楽しい授業をつくる」

もたちの間にも協働性が徐々に根づいているようだ。以前は、静かだった子どもたちが、プログラミング教育の導入後は積極的になり、どの授業でも周りと話し合ったり、自分の考えを伝えようとしたりする姿が多く見られるようになった。

さらに注目すべきは、授業での知識理解も深まっていることだ。

「思いを形にする作業は子どもたちにとっては楽しく、その過程で繰り返し考えることで理解が定着し、友だちの作品を見ることで理解はさらに深まります。今では算数が大好きという子も増え、実際に『算数って楽しい』という言葉が聞かれた時には、プログラミング教育をやって本当によかったと思いました」（藤原先生）

## 展望

### 系統的指導の確立を目指し 評価方法も検討中

今年度は実践の深化に努めている。

「前年度は、児童も教員もタブレットPCに慣れることを第一に考え、とにかくやってみることを重視して、トライ・アンド・エラーを重ねました。今年度は、年間計画にプログラミング教育を組み込み、発達段階に応じた系統性を整理して、各学年のスキル表や到達目標を作成することを目指しています」（鈴木先生）

教員によって頻度や内容に濃淡の差はあるが、系統的に整理することにより、どの教員が担当しても同じ指導ができる体制を目指している。

『『プログラミング』という言葉にハードルの高さを感じる教員もいますが、文字列は扱いませんし、ソフトウェアの操作も簡単です。まず、授業に取り入れようという意識を持つことが大切だと思います。今後、研修を行い、授業での活用法も共有していく予定です」（鈴木先生）

評価は、今年度については、教科と「総合的な学習の時間」に分けて

評価することを検討している。例えば、算数の授業であれば、作成した文章題の内容については算数で評価し、プログラミング作業に関しては「総合的な学習の時間」で評価する。また、作品の出来栄よりも、友だちに分かりやすく伝える方法をどれだけ深く考えられたかといった意欲や態度を重視する方針だ。

これまでの実践により、プログラミング教育は算数や理科が適切だと考えているが、他教科でも有効な活用法を模索していく予定だ。例えば、国語では、自作の物語のアニメーションを作成したり、社会では町探検での発見を基に発表用資料を作ったりといった学習活動を想定している。

「プログラミングの作品作りは、子どもにとって楽しい活動です。実践を通して論理的に分かりやすく伝える力を伸ばし、成功体験を積み重ね、自信をもって中学校に進んでほしいと考えています」（向原校長）

## 特集まとめ

### 〈新しい能力〉の獲得にも、知識の獲得にも、 アクティブ・ラーニングがますます重要に

ここまで、〈新しい能力〉をどう捉えればよいか、を明らかにしつつ、その能力を育む方策として2つの事例を見てきた。それぞれの話を要約すると以下ようになる。

#### ●解説 松下教授のお話

- ・社会のグローバル化や流動化、情報化により、〈新しい能力〉が求められるようになった。特にOECDが提唱する概念は文部科学省が目指す方向と親和性が高く、そこで挙げられた「3軸×3次元+メタ学習」と「普遍性と時代性」の視点で自らの教育を振り返ることが、今後を考える上で重要。
- ・〈新しい能力〉の育成に向けて推奨されるアクティブ・ラーニングを行う上では、汎用的な力と知識のバランスを考慮し、「深い学び」「対話的な学び」「主体的な学び」を行うことが求められる。また、教育活動全体で考えることも大切。

#### ●実践事例1 探究的な学習

- ・探究的な学習の特徴は、子ども自身が課題の設定を行い、一連の過程を経て自らの考えや課題を更新し、探究のサイクルをらせん状に繰り返していくことにある。
- ・探究的な学習の重要性は、次期学習指導要領や入試でもま

ずますます高まっている。また、探究的な学習は知識理解が深まることで、教科学力にも好結果をもたらしている。

- ・探究的な学習を進める上では、「質問・疑問マトリクス」や「思考スキル」、「シンキングツール」などの活用が効果的。
- ・評価方法として、質的・直接的な評価が求められるが、そのためのルーブリックを教員自身が作成することが大切。

#### ●実践事例2 プログラミング教育

- ・大和田小学校におけるプログラミング教育は、子ども向けの簡易なプログラミングソフトを活用して、誰かに伝えたい・表現したいことを形にする学習プロセスであった。
- ・筋道を立てて考えるプロセスを通して、論理的な思考力が身につく。また、協働作業を通して協働性も身につく、教科の楽しさや知識理解の深まりにもつながっている。

2つの事例で特に印象的だったのは、これらの学習手法が汎用的な力のみならず、教科学力の向上にもつながるという事実だ。知識獲得も意識しつつ、アクティブ・ラーニングを積極的に進めることがますます重要になったと言えるだろう。

# 次期学習指導要領を見据えた 先進的な英語の 取り組み

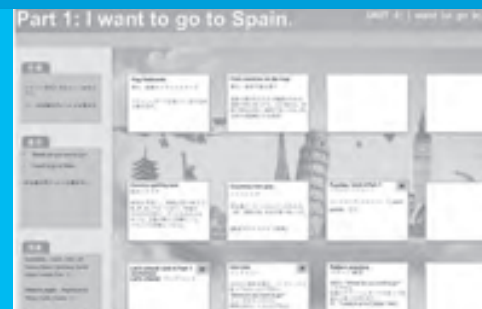
これまでもたびたび取り上げられてきたように、次期学習指導要領では、小学校高学年で英語の教科化が検討され、中学年では外国語活動が始まる予定だ。また、大学入試においても、英語4技能をバランスよく評価する動きが進められている。これら大きな変化が目前に迫っている中、教育委員会でも小・中の英語教育を変えようという動きが、各地で急速に広がっている。そこで今回は、次期学習指導要領改訂を見据えて、改革に着手している2つの事例を紹介する。

## 事例 1

千葉県  
流山市

▶▶▶ 14 ページ

独自の小学校英語プログラムと  
小・中のカリキュラム連携強化で  
英語力を大きく伸ばす



## 事例 2

奈良県  
天理市

▶▶▶ 20 ページ

過疎地の学校存続を目指し、  
学校の特色化の一環として  
オンライン英会話授業を導入



# 独自の英語プログラムと 小中連携の指導体制を整え、 世界で活躍する人材を育てる

「自立する児童生徒」の育成を目標とする千葉県流山市が、「確かな学力の育成」の具体策の1つに掲げているのが、英語教育の推進だ。小学校で活用する「流山市英語プログラム」は、指導主事や小・中学校教員、ALTが協力して作成。内容を全小学校で共有し、教育の質を担保している。2014年度には、文部科学省の拠点事業の指定を受け、小・中・高が連携して取り組みを深化させている。

- ◎東京都心から25km圏内にあり、利根運河と江戸川に囲まれた、森や公園が多い自然豊かな地域。2005年のつくばエクスプレスの開業により首都圏へのアクセスがよくなり、「都心から一番近い森のまち」として、人口が年々増加中。
- ◎人口…約17万8000人 ◎面積…35.32km<sup>2</sup>
- ◎市立校数…小学校16校、中学校9校 ◎児童生徒数…14,048人
- ◎電話…04-7150-6105（学校教育部指導課）
- ◎URL…<http://www.city.nagareyama.chiba.jp/176/index.html>

## 千葉県流山市 プロフィール

## 教育長の 戦略

# 市内全小・中学校で指導ノウハウを 共有し、英語教育の質を担保する

流山市教育委員会 教育長 後田博美

## 臆せずに英語を使える 子どもたちを育てたい

現在、流山市では人口増加が続いており、2015年の1年間で約4,000人増えました。首都圏への利便性もさることながら、本市の教育に魅力を感じて居住を決めた家庭も少なくありません。保護者や地域からの期待が大きく、教育の質の向上が大きな課題であることから、9年間の連続した教育環境づくりに力を入れ、小中一貫した教育を推進しています。

各中学校区では、それぞれ特色を生かした活動をしています。例えば、敷地が隣接している市立西初石小学校と西初石中学校、千葉県立流山おおたかの森高校は、3校合同のあいさつ運動や清掃活動、国語や算数・

数学で教科内容接続のための情報交換会などを展開しています。

本市の子どもの多くは素直で真面目ですが、よい意味で我を通し、自分の考えを堂々と主張できる子どもはそれほど多くありません。そうした子どもたちがもう一步、ステップアップするために必要な施策として、2011年の教育長就任時に「流山市学校教育指導の指針 グランドデザイン」(図1)を示しました。目標とする「自立する児童生徒」の実現に向けて、学力面の充実を図る施策の1つに、「グローバル社会で生きる力の育成」を掲げています。

子どもに英語によるコミュニケーション力をつけたいというのは、小学校校長をしていた頃からの思いです。本市には外国人が比較的多く居

住し、日常的に接する機会も少なからずあります。そこで、子どもたちに、日常会話ができる英語力や、臆せずに英語を使おうとする姿勢を身につけてほしいと考え、地域の外国の方々にも協力してもらい、校長在任時に週1回の国際理解教育を行っていました。そうした活動を全市に広げたいという思いから、グランドデザインに英語教育を盛り込んだのです。

## 全校体制でノウハウの浸透と 教育の質の担保を図る

ALTは、市で15人を直接雇用し、学級数に応じて市内全小・中学校25校に配置しています。そのほかに、英語活動指導員が各小学校に1人常駐し、ALTとともに指導にあっています。これも市の予算で雇用して



うしろだ・ひろみ 中央大学経済学部卒業後、千葉県内の公立小学校教諭、流山市教育委員会指導主事、流山市立南流山小学校校長、流山市教育委員会学校教育課課長、同学校教育部部长、流山市立小山小学校校長などを経て、2011年度から現職。

うは、全小学校で共有しました。

英語の年間授業時数は、拠点校の3・4年生は35時間、5・6年生は70時間ですが、そのほかの学校も教育課程特例校の制度を利用して、3～6年生で各35時間としました。

### 数値を意識した効果検証が教育をよりよくする

グランドデザインを示した際に、私にはもう1つの思いがありました。それは、先生方に「数値」を意識してもらうことです。教育の成果は短時間で測れるものではありませんが、言葉だけでは保護者や地域の理解がなかなか得られないのも事実です。そこで、2011年度比で10%の学力向上を目標に打ち出し、指標の設定や活動内容は各校に任せながらも、検証結果を報告してもらうようにしました。難易度の高い目標であるた

め、たとえ達成できなかったとしても、客観的に分析してその要因を把握し、解決策を考え、校内で足並みをそろえて課題解決に取り組む体制を構築してほしいと考えたのです。

成果は大きく表れました。先生方の意識改革と努力が実り、2015年度までの3年間でほぼ目標を達成できました。2016年度の市予算で教育費の比率が2番目に高いのは、教育行政が評価された結果だと捉えています。

私たちの願いは、世界で活躍できる人材を流山から輩出することです。それは、海外に出るとのことだけではなく、グローバル社会の中で認められるような存在になってほしいということです。今まで以上に教育を充実させ、子どもたちの能力と志を高めていくことが、本市の使命だと考えています。

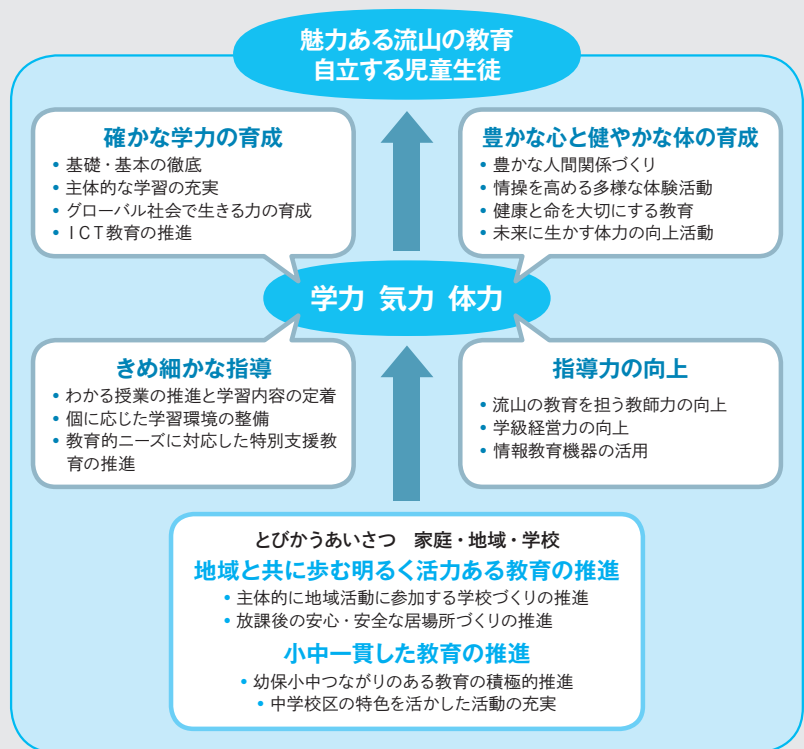
います。

2014年度には、千葉県内では本市が文部科学省「英語教育強化地域拠点事業」に採択されました。小学校3校、中学校2校、県立高校1校を拠点校として、合同の研究会、CAN-DOリストの作成と活用、児童・生徒や教員間の交流などを進めています。特に、小・中の指導内容の共有は、適切な接続や指導の効率化を図る上で大きな役割を果たしています。

本事業は市全体で取り組み、各校の教育の内容や質をできる限りそろえるように心がけています。その実現のため、各校にノウハウが浸透するように、最初から全校が足並みをそろえて取り組む必要があると考えました。

例えば、小学5・6年生が使用する「流山市英語プログラム」は、2013年度から、指導主事や小・中学校の教員、ALTが協力しながら作成しました。児童用ワークシートも同様に作成し、それらの活用ノウハ

図1 流山市学校教育指導の指針 グランドデザイン



体力面での実績も目覚ましく、オリンピック選手を輩出しているほか、千葉県の「遊・友スポーツランキングちば」の上位10校に、流山市の学校が複数ランクインしている。

\*流山市教育委員会提供資料を基に編集部で作成



## 教育委員会の 施策

# 「流山市英語プログラム」を作成し 全小学校で系統的な英語指導を展開

## 流山市教育委員会

### ALTのノウハウを活用し 独自のカリキュラムを作成

流山市の英語教育には、2つの特徴がある。1つは、市独自に小学5・6年生用の「流山市英語プログラム」を作成し、それを基に市内すべての小学校が指導していること。もう1つは、中学校区内の小・中学校で英語教育を連携していることだ。この2つについて、具体的な取り組みを見ていく。

「流山市英語プログラム」の作成に着手したのは、2013年度のこと。それまで、小学校では、『Hi, friends!』を教材として、担任とALT、英語活動指導員が協力し、子どもの実態に応じた指導をしていた。ところが、指導方針が統一されていなかったため、担任やALTによって授業内容が異なり、学年間で活動内容が重複していたり、子どもには難易度の高い内容が含まれていたりするなど、指導の系統性に課題があった。学校教育部指導課の郡司美紀指導主事は、

次のように説明する。

「小学校英語の教科化を見据え、発達段階に応じて系統的に指導できるカリキュラムが必要でした。そこで、当時の実態を危惧した教育長の強い意向もあり、5・6年生の外国語活動について、統一のカリキュラムの作成にとりかかりました」

まず、市内のALTが各校・各学年でどのようなことを教えているのかといった情報を集め、それらを指導主事とALTが中心となって整理した。時には、中学校の英語科教員のアドバイスを得ながら、「5年生には難しい内容ではないか」「小学校卒業時までに、ここまでではできてほしい」

といった議論を重ねた。そうしてつくり上げたカリキュラムを基に、各校が年間指導計画を立て、各授業の指導案と児童用ワークシートを作成した。

「2014年4月までに1学期の指導計画、秋までに2・3学期の指導計画を立てるという形で進めたので、現場の先生方は相当苦労されたと思います。市教委では、年間指導計画のモデルを作成し、先生方が進めやすいようにアドバイスするなど、支援に努めました」（郡司指導主事）

各校の実践で得られた成果や課題は、指導主事とALTが学校を訪問して共有した。そして、現場からの「内容的に難しい」「やることが多い」と

図2 「流山市英語プログラム」UNIT4 Part1（小学6年生対象）



「流山市英語プログラム」は6ユニットから成り、1つのユニットは2～4のパートで構成される。ユニットごとに目標が設定され、さらに各パートには目標、学習する表現、扱う語彙が示されている。具体的な活動内容も例示され、これを基に各校でワークシートなどを活用し、授業を行っている。  
\*流山市教育委員会提供資料をそのまま掲載



学校教育部指導課  
課長

**佐藤智子**

さとう・ともこ

千葉県内の公立中学校教諭、教頭、流山市教育委員会指導主事などを経て、2016年度から現職。



学校教育部指導課  
指導主事

**郡司美紀**

ぐんじ・みき

千葉県内の公立中学校教諭などを経て、2014年度から現職。担当教科は英語。

いった意見を受けてカリキュラムを見直し、2014年度末により平易でシンプルな第2版「流山市英語プログラム」を完成させた(図2)。

## 教員用指導書も作成し 指導の標準化を図る

5・6年生で活用している「流山市英語プログラム」は、3・4年生で取り組む『Hi, friends!』の内容を継承・発展させる内容となっている。教室で使う英語表現などを学ぶ「ユニット1」に始まり、あいさつ、アルファベットの基本、自己紹介、自分が住む町の紹介、訪れたい国・都市とその理由などの内容を扱う、全6ユニットで構成されている。

教員用指導書も作成し、「すぐに英語を使わせるのではなく、楽しいアクティビティーでゆっくり学習していく」「言葉以外のコミュニケーションについても紹介する」など、担任やALTが配慮すべき点も盛り込んだ。

それらは、すべてデータ化して市内の小・中学校に配布。2015年度からは、全小学校が年間35時間分の指導計画と指導案を基にして、スムーズに英語教育を進めている。

## 小・中の情報共有により 中学校英語の深化を図る

「流山市英語プログラム」で培った英語力を、中学校が引き継いで、さらに伸ばしていくための鍵となるのが、小中連携だ。

「中学校教員をしていた当時、小学校で外国語活動を経験してきた生徒に初めて英語の授業をして、生徒たちが予想以上に英語でコミュニケーションが取れることに驚きました。今や生徒は英語の初修者ではありませんから、小学校で身につけてきた英語力を中学校でさらに伸ばすという意識で授業を行う必要があります。そのためには、小・中学校の教員の

間でしっかり情報を共有し、生徒の英語力を把握しておくことが欠かせません」(郡司指導主事)

「流山市英語プログラム」の指導案例を作成した時には、「流山市英語プログラム推進委員会」の全6回のうち2回に、中学校の英語科教員が参加し、中学校の立場から指導案や使用教材についてアドバイスを得た。さらに、市内の小・中学校の英語担当者が集まる「流山教育研究会」(年3回)や外国語活動研修会、夏休みに親睦会を設けて交流を深めるといった中学校区独自の取り組みも行われている。学校教育部指導課の佐藤智子課長は、次のように語る。

「以前から小中連携に力を入れてきたこともあって、英語に限らず、他教科でも、小・中学校の教員同士が課題を共有しようとする意識を強く持っています。拠点事業の推進にあっても、そのような本市の強みを生かすことができていると感じます」

## 英語力の「見える化」で 成果と課題を明らかに

今では、小学校には「流山市英語プログラム」に基づく外国語活動が定着し、中学校では小学校の教育内容を踏まえた指導が行われるようになった。当初、小学校には外国語活動の指導をためらう教員もいたが、拠点事業が始まってからは前向きに取り組む意識が浸透している。

「一度も外国語活動を経験していない小学校教員は、ほとんどいないと思います。国や市がここまで力を入れている以上、避けては通れないという意識もあるからでしょう。楽しみながら英語を身につけてほしいと考える教員も多く、小学校には英語で書かれた掲示物がたくさん貼られるようになりました。一方、中学校には教科の壁が存在しているため、学校全体の取り組みにする方法を模

索しています」(佐藤課長)

以上の英語教育を進めた結果、英検3級程度の英語力を持つ中学3年生が、国が目標とする50%を超えた。70%以上の中学校もあるという。

2016年2月には、拠点校の中学2年生がGTEC for STUDENTS\*1(以下、GTEC)を受検した。GTECにはライティングのテストがあり、複数の外国人採点者が観点別に生徒の英語力を評価する。

「個人別成績票が返却されるだけでなく、採点者から生徒一人ひとりに、英語でメッセージと学習のアドバイスを書いてもらえます。生徒が今後の学習に生かせると考え、採用を決めました」(郡司指導主事)

GTECの結果では、ライティングが自分の意見や感想を2~3文の英語で書くことができるグレード2を超えた一方、リーディングは期待したような結果が得られなかった。そのため、2016年度は様々な洋書を購入し、多読によるリーディング力の強化に取り組んでいるという。

また、すべての中学校と拠点校の小学校が各校独自のCAN-DOリストを作成し、各学期・各学年で身につけさせたい力を意識した指導が行われるようになった。

このように、英語力を客観的に測ることで生徒個々の課題発見につながり、それらを基にした新たな取り組みへと発展しているのである。

今後の課題は英語と国語の連携を図ることだと、佐藤課長は言う。

「元々人前で話すのが苦手な子どもたちに、英語で話をさせるのは容易ではなく、語彙が少なければ表現力もつきません。これからは、国語でもプレゼンテーションやShow and Tell\*2などの要素を取り入れ、英語と国語を両輪として位置づけて、相乗的に表現力を高めていきたいと考えています」

\*1 ベネッセが提供する中学・高校生対象のスコア型英語テスト。「聞く」「読む」「書く」の3技能を測る。さらに、「Speaking(話す)」をオプション受検することで、4技能を測ることも可能。

\*2 みんなの前で何かを見せながら、それについて話をする活動。



## 学校現場の 実践

# 小学校の学習内容を踏まえた パフォーマンス重視の授業で力を伸ばす

## 流山市立西初石中学校



◎ 1985（昭和 60）年創立。教育目標は「自ら学びとり、自立し、さわやかな言動がとれる生徒の育成」。2014 年度、文部科学省「英語教育強化地域拠点事業」の指定を受ける。

校長 高橋徹先生

生徒数 311 人

学級数 10 学級（うち特別支援学級 1）

電話 04-7154-3091

URL <http://www.nagareyama.ed.jp/nshatutyuu/index2011PC.htm>

### 小学校での学習内容と 理解度を把握し、授業を構築

流山市立西初石中学校は、市内でも規模が小さい学校だ。同校の課題について、高橋徹校長はこう語る。

「本校は落ち着いた環境にあり、教育に対する保護者の期待には高いものがあります。生徒は素直で真面目な半面、力強さや粘り強さに欠ける点があり、自己決定力や自立心を養うことが課題だと感じています」

そうした中、2014年度に文部科学省「英語教育強化地域拠点事業」の指定を受け、隣接する同市立西初石小学校、千葉県立流山おおたかの森高校と、小・中・高の連携を図りながら、英語教育の研究に取り組んでいる。同校の研究の柱は、①小学校の外国語活動の成果を生かした指導方法の構築、②言語活動を中心とした授業のあり方、③外国語表現・理解能力の育成、④CAN-DOリストを活用した学習到達目標の設定、⑤英語で行う授業の検証の5つだ。

この中で、①小学校の外国語活動の成果を生かした指導方法の構築は、小中一貫した教育を推進する市の教育の根幹にかかわる部分だけに、同

校でも特に力を入れている。

英語科教員は、入学した生徒の英語力を見取る以外にも、小学校で活用されている『Hi, friends!』や「流山市英語プログラム」にすべて目を通し、小学校の学習内容の把握に努めている。例えば、小学6年生で「I want to be～」という表現を使って将来の夢を語らせていることが分かれば、中学2年生で不定詞を扱う際に、生徒が経験していることを踏まえて、授業展開を構想する。

ただし、小学校で扱った表現でも、生徒は学習済みという前提で授業を進めるわけではない。英語科で研究主任の柿葉敦子先生は、次のように説明する。

「授業で『6年生の時にやったよね』と言ってしまうと、生徒には過度なプレッシャーになります。授業の最初に、生徒がどの程度、文法を身につけているのかを探り、小学校で経験したことを生徒が自分で思い出せるように配慮しています」

拠点事業3年目の2016年度の新生入生は、その大半が、<sup>りょうちょう</sup>流暢に発音された英文を、感覚的ではなく、文法的にきちんと理解して聞き取り、基本的な名詞なら正確なスペルで書け

る力があるという。

「2年前に1年生を担当した時よりも、生徒たちの英語力のレベルが格段に上がっています。小学校で英語を用いたコミュニケーションを図る多様な機会があることが、大きな強みになっていると感じます」

生徒の英語力向上に伴い、1年生での指導内容を変えた。例年なら、1学期は教科書のプログラム1までしか進まなかったが、2016年度は、1学期の中間考査で「I am～」などを扱うプログラム2までを範囲とした。それでも、中間考査の正答率が8割を超えたという。例年は5月いっぱいにかけて徹底的に行っていたフォニックス指導も、4月に少し扱う程度にとどめた。

### アウトプット重視の授業で ライティング力が向上

授業はペアワークやスピーチなどの活動が中心で、学期に1回、パフォーマンステストを実施している。例えば、1年生では1学期に1分間の自己紹介スピーチ、2学期に他己紹介スピーチを、2年生では1学期にALTとの90秒の対話、2学期に将来の夢についてのスピーチ及び英作文などを行う。評価は、声の大きさや目線、文法、伝えようとする意欲などの観点を設け、1つの観点につき、3～4段階で評価する。

2年生以降の定期考査では、エッセイ・ライティングを出題する。その練習として、1学期の授業で「ゴールデン・ウィークの思い出」をテーマにした英作文を書かせた。まずは、

生徒が辞書を引きながら自力で書き、どうしても分からない場合は教員に質問する。英作文は教員が添削し、その指摘を受けて、生徒がリライト。完成した英作文を全員分、廊下に掲示した。

さらに、2年生の朝学習では、毎週金曜日を「英語の時間」とし、英語で書かれた簡単な時事ニュースを読み、質問に答えるといった活動も行っている。それらの日常的な取り組みの結果、2016年2月、2年生全員が受検したGTECでは、ライティングで好成績を収めた。

「ライティングを含めた生徒の英語力を客観的に測ろうと、GTECの受検を決めました。答えは丁寧に添削されていて、ネイティブの採点者からの英語のアドバイスは生徒にとって励みになっていました。特に、成績上位層の生徒は知的好奇心を刺激されたようです。また、教員用帳票では、結果が詳細に分析されていて、指導の参考になりました」(柿葉先生)

一方、GTECで伸び悩みが明らかになったリーディングについては、予習を課さずに初見で教科書を読ま

せるなど、日々の授業で強化を図っている。

「大学入試が英語の4技能を問う試験に変わりつつあることを、普段から生徒に伝えています。高校入試でも英文和訳はほとんど出題されず、長文を読み、内容について問う問題が増えました。知らない単語があっても、その意味を推測しながら素早く読み、文章全体を把握する力が求められていることを、生徒には理解してほしいと考えています」(柿葉先生)

### CAN-DO リストを作成し 到達目標を明確化

CAN-DOリストは、柿葉先生が千葉県主催の「CAN-DOリスト研究協議会」に参加してノウハウを学び、2015年度に作成した(図3)。内容は、英語が苦手な生徒でも到達できるような幅の広い表現するように配慮し、「○語以上」といった具体的な数値目標は示さず、文法用語も盛り込んでいない。これを基に、各単元で身につけさせたい力を観点別に設定し、単元計画に反映している。

到達目標が「～が理解できた」か

ら「～を用いてできる」という内容に変わったことで、生徒の学習意欲にも変化が見られた。

「ペーパーテストが苦手でも、口頭での表現が得意な生徒もいます。定期考査だけでは測りきれない力をパフォーマンステストで評価することで、多くの生徒の自信や意欲を高めることにつながっています」(柿葉先生)

一方、語彙や文法の定着が不十分なため、定期考査で期待通りの得点が取れないことも浮き彫りになった。この反省を踏まえ、2016年度は、言語活動と文法指導のバランスに配慮したリストの改訂を進めている。

今後の課題は、小学校段階で英語に対して苦手意識を感じている生徒への対応だ。英語科の滑川寿範先生は次のように語る。

「拠点事業への指定以降、生徒の英語力が高まった反面、入学段階から苦手意識を持つ生徒が見られるようになりました。中学校で気持ちをリセットさせ、英語によるコミュニケーションを楽しく感じられるよう、指導を工夫していきたいと思います」

図3 生徒配布用 CAN-DO リストとパフォーマンステストの内容

#### 2015年度2年生 CAN-DO リスト

話すこと	(やりとり) 基礎的な語句、定型表現を用いて、日常的な話題について、簡単な意見交換をしながら対話をつなげることができる (発表) 前もって発話することを用意した上で、日常の話を限られた構文を用いて簡単な意見や説明を行うことができる
書くこと	簡単な語や基礎的な表現を用いて、まとまりのある文章(日記、メール、予定、スピーチ原稿など)を書くことができる
聞くこと	ゆっくりはっきりと話されれば、日常生活に必要な場所や時間などの具体的な情報を聞き取ることができる
読むこと	短い簡単な物語やまとまりのある文章を読んで、内容を理解することができる

#### 2015年度2年生 パフォーマンステストの内容

時期	内容	CAN-DO (英語を使って何ができるようになるか)
1学期	ALTとの90秒の対話(やりとり)	つなぎ言葉を使いながら対話を続けられるようになる
2学期	全体の前で、自分の将来の夢について発表(Speech → Writing)	英語で将来の夢について語り、文章で伝えられるようになる
3学期	ディベート形式で賛成、反対について自分の意見を言う(Writing → やりとり)	自分の意見を文章で表し、英語で主張できるようになる

\*西初石中学校の提供資料を基に編集部で作成



校長  
高橋 徹

たかはし・とある

「生徒には、粘り強く物事に取り組む姿勢と、自分で考え、表現する力を身につけてほしい」



教諭  
柿葉敦子

かしば・あつこ

研究主任。英語科。「生徒には、将来、英語を使って物怖じしない、立派な国際人になってほしい」



教諭  
滑川寿範

なめかわ・としのり

学年副主任。英語科。「自分の考えを自信を持って発信できる社会人として、日本人として、活躍してほしい」

# オンライン英会話授業を導入。 充実した英語教育で 過疎地の学校の特色化を図る

奈良県天理市では、文部科学省「全国学力・学習状況調査」などの結果分析に基づき、教育長以下、現場の教職員が課題を共有し、基本的な生活習慣の確立や表現力の向上などに力を入れる。「当たり前」の施策を地道に継続するとともに、過疎化が進む地域にある小学校でオンライン英会話授業をスタートするなど、新しい取り組みにも積極的にチャレンジしている。

- ◎ 1954年、3町・3村が合併し、天理教教会本部の所在地として、全国初の宗教団体名を冠した市が誕生した。JRや私鉄、幹線道路が通る交通の要所。三角縁神獣鏡が33面も出土した「黒塚古墳」など多数の古墳が点在する。
- ◎ 人口…約6万7000人 ◎ 面積…86.3km<sup>2</sup>
- ◎ 市立学校数…小学校9校、中学校4校 ◎ 児童生徒数…4,191人
- ◎ 電話…0743-63-1001（代表）
- ◎ URL…<http://www.city.tenri.nara.jp/kakuka/kyouikuinkai/>

## 奈良県天理市 プロフィール

## 教育長の 戦略

# 調査分析で課題を「見える化」し、 学力向上につながる取り組みを策定

天理市教育委員会 教育長 森継 隆

## 明確な統計データを共有し 具体的な教育施策を検討

天理市は、古墳や神社が数多く点在する歴史豊かな地域であり、音楽やスポーツなどの活動も盛んです。私は2015年に教育長に就任して以来、この魅力あふれる天理がさらに発展していくことに貢献できる子どもの育成を目指してきました。

本市ではここ数年、学力が伸び悩む傾向にあります。文部科学省「全国学力・学習状況調査」の結果でも無回答が目立つなど課題が見られ、書く力を含めた自己表現力を高める必要があると強く感じています。

現場の先生方と足並みをそろえて対策を進めるためにまず必要なのは、説得力のあるデータを提示し、課題

意識を共有することです。そこで、「全国学力・学習状況調査」や奈良県が独自に実施する学力調査について結果分析を進めてきました。

最も注目したのは、基本的な生活習慣に関するデータです。まず、大阪府茨木市の『「一人も見捨てへん」教育』\*を参考に、課題の「見える化」を図るため、就寝・起床時刻や朝食、宿題など6項目の回答を4段階で得点化（24点満点）し、その合計値を3つの群に分けました（図1）。

そして、各群の「全国学力・学習状況調査」の平均正答率を全国平均と比べたところ、基本的生活習慣の得点が高い群ほど、学力点も高いことがわかりました。こうして生活習慣の乱れが学力にも大きな影響を与えていることが、明確になりました。

テレビ・ゲーム・携帯電話（スマートフォン）に触れる合計時間を見ると、本市の子どもは国や県の平均を上回っていました。同様に、平均正答率との相関を分析すると、メディアとの接触時間が短いほど、学力が高いこともわかりました。それらの統計データを、教委、学校、保護者と、教育に携わるすべての人たちで共有し、具体的な施策を講じています。

## 基本的生活習慣の確立が 学力向上につながる

生活習慣については、子ども一人ひとりの調査結果を得点化し、そのデータを活用して個別指導につなげるよう各校に伝え、家庭にも協力を呼びかけています。2016年度はさらに、子どもが自分の毎日の生活習

\*志水宏吉編著、茨木市教育委員会著『「一人も見捨てへん」教育』（東洋館出版社）より。

慣を数値化してグラフで表すなどの「見える化」を進めるとともに、「ノーテレビ・デー」を実施するなど、より具体的な施策を検討しています。

「基本は授業」という考えから、授業改善にも取り組んでいます。「全国学力・学習状況調査」の結果を見ると、「授業の冒頭で目標を示す」「最後に学習内容を振り返る」を行ったかという設問の肯定率が、児童・生徒では低かったのに対し、教員側はそれらを実施していると認識していることが分かりました。このギャップを解消するために、「めあて」と「振り返り」の指導を徹底するように働きかけたところ、早くも小学校では授業理解度の向上が見られています。

書く力を含めた自己表現力が弱いという課題については、国語力の指導の充実を図るため、国語の授業改善を進めるとともに、読書の推進にも力を入れています。

例えば、読んだ本の書名や感想を記録する「読書手帳」(図2)を導入しました。昨年度は、20冊読むと、地域の協賛していただいたファーストフード店でフライドポテトをもらえるというシステムが子どもたちに好評で、全校で進んで取り組んだ学校もあります。また、学習の成果を披露する場として、スピーチ大会などを

独自に実施する学校も現れています。

さらに、自己表現を含むコミュニケーション力の向上をねらいとして、2016年5月、ベネッセと連携して天理市立福住小学校の5・6年生を対象にオンライン英会話授業を始めました。私が実際に授業で、英語によるリアルなコミュニケーションが交わされている様子を見た時、この活動は子どもたちの将来にとってよい経験になると強く感じました。今後、同校での実践を他校に広げる可能性も探りたいと考えています。

### 「当たり前」のことを 全員ができるまで継続する

あらゆる教育施策の最終的な目標を一言で表すと、「子どもたちに学校が楽しいと思ってもらうこと」に尽きると思います。今後は、「全国学力・学習状況調査」の「学校に行くのは楽しいと思いますか」の質問項目の肯定率を高める施策も検討していきたいと考えています。

学校が楽しい場であるためには、子どもたちが夢を語れる環境であることが大切です。そのためには、まず先生方に夢を語ってほしいと思います。先生方が育てたい子ども像を自由に語り合う中で、学校の雰囲気は大きく変わっていくことでしょう。



もりつぐ・たかし 大阪大学大学院理学研究科博士前期課程数学専攻修了。奈良県立山辺高校、郡山高校、奈良高校、橿原高校、二階堂高校勤務を経て、2014年、奈良県立高取国際高等学校長に就任。2015年から現職。

そして、オンライン英会話授業のような、新しい試みに積極的に挑戦し、子どもが楽しく学べる環境づくりをするとともに、地道な努力も大切にしていきます。今、最も力を入れている基本的な生活習慣の確立に向けた施策は、ごく当たり前のことです。すべての子どもができるようになるまで継続し、学びの基礎を築いていきたいと考えています。

図1 基本的な生活習慣と学力との関係

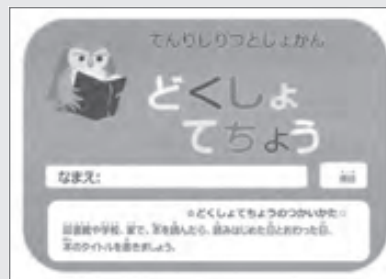
#### 2015年度小学校6年生

基本的な生活習慣の 得点群	平均学力点と 全国平均との差	人数の 割合
上位 (20点以上)	+8.4	32%
中位 (16点～19点)	-0.1	50%
下位 (15点以下)	-12.4	18%

- 〈質問項目〉
- ①朝食を毎日食べていますか
  - ②毎日、同じくらいの時刻に寝ていますか
  - ③毎日、同じくらいの時刻に起きていますか
  - ④学校の宿題をしていますか
  - ⑤普段、どれくらいTVを見ていますか
  - ⑥普段、どれくらいゲームをしていますか

\*天理市教育委員会提供資料を基に編集部で作成

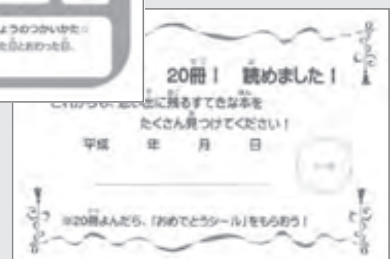
図2 「読書手帳」



手帳には、読んだ本の書名や感想を書く欄があり、20冊読んだら、市立図書館が学校でシールを貼ってもらえる。

それを協賛したファーストフード店へ持っていくと、無料でフライドポテトがもらえるというシステム。

\*天理市教育委員会提供資料をそのまま掲載





教育委員会の  
施策

# 表現力育成と過疎地の学校存続のため、特色ある英語教育を展開

## 天理市教育委員会

### 家庭へのリーフレット配布で生活習慣の確立に注力

天理市教育委員会では、文部科学省「全国学力・学習状況調査」、並びに「奈良県学力・学習状況調査」の結果を分析して課題を洗い出し、それらの解決に向けて、2015年度に新たな教育施策を打ち出した。

早急に解決すべき課題の1つは、基本的な生活習慣の定着だ。従来、生活習慣に関する指導は各校に委ねてきたが、学力向上の土台となる規則正しい生活習慣をすべての子どもに確立させることを目指し、市としての指導方針を策定した。

この課題解決には保護者の協力が欠かせない。そのため、指導方針に基づいたリーフレットを作成し、小・中学生のいる全家庭に配布した。

リーフレットには、子どもの学びの習慣化に向けたポイントを示すとともに、生活習慣と「全国学力・学習状況調査」の平均正答率に相関があることを示すグラフを載せて、学

力向上には生活習慣が重要であることを訴えた(図3)。学校教育課の吉岡昌則課長は、次のように説明する。

「以前は、どの家庭でも就寝時刻があまり変わらないなど、生活習慣に統一感がありました。ところが、近年は保護者の価値観やライフスタイルが多様化し、それが子どもの生活にも影響しています。そうした状況を踏まえ、各家庭で今一度見直していただきたいことをまとめました」

### 国語の授業改善などでアウトプットする力を育成

様々な調査結果から、表現力に課題があることも分かっている。そこ

で、国語の指導に特化した研究会を立ち上げ、個々の学校で取り組んできた良い実践を共有するなど、国語力向上の取り組みにも力を注ぐ。

自己表現力が高まれば、友だちとの相互理解が深まり、人間関係も良くなっていく。その結果、一人ひとりの自尊感情が高まり、不登校やいじめといった問題が少なくなることも期待している。

「自分や友人、そして地域の良さを発信できるコミュニケーション力を育む中で、『自分が大好き、友だちが大好き、ふるさとが大好き』という心を育てることが最終的なねらいです。そうした力を持つことが、より

図3 規則正しい生活習慣定着を啓発する保護者向けリーフレット



子どもの学びの習慣化のポイントとして、①適切な睡眠をとる習慣づくり、②朝食を毎日とる習慣づくりなど、5つを挙げた。



生活習慣の乱れが、学力にも反映されることを、「全国学力・学習状況調査」の結果を基に説明し、説得力を持たせた。

\*天理市教育委員会提供資料をそのまま掲載



学校教育課課長  
**吉岡昌則**  
よしおか・まさのり

奈良県内の公立小学校教諭、学校教育課勤務を経て、2014年度から現職。



学校教育課  
指導主事  
**笹尾美香**  
ささお・みか

奈良県内の公立小学校教諭を経て、2016年度から現職。

良く生きていくためには欠かせない  
と捉えています」(吉岡課長)

授業では、まず正確に読んだり聞いたりすることを大切にし、その中で考えたり感じたりしたことを書いたり言い表したりする活動を重視している。こうした活動を通して、積極的にアウトプットする力や意欲を育てたいと考えている。学校教育課の笹尾美香指導主事は、活動のねらいを次のように説明する。

「自己の内面にとどまらず、考えを他者に伝えようとしたり、自分にできることを考えたりする力を身につけて、将来的に社会に貢献できる大人に育ててほしいと願っています」

## オンライン英会話授業で 表現する意欲や態度を育てる

コミュニケーション力育成の一環として、2016年度、天理市立福住小学校に英語教育を導入した。

「国語力向上の取り組みなどで表現力の育成に努めていますが、さらに英語というコミュニケーションツールを習得することで、コミュニケーションの対象を世界中の人々に広げたいと考えました」(吉岡課長)

2020年度には小学校高学年で英語が教科化され、2018年度には先行実施が始まる予定だ。まずは実践校でその対策にいち早く着手して効果を検証し、他校にも英語教育を広げていきたいという意図もある。

同校で取り組みを進めるに至った背景には、過疎化が著しい地域の実情がある。同校は市内東部の高原地域にある全校児童数37人の小規模校で、外部の人との接触が他地域と比べて限定されやすい環境にある。

「子どもたちは小集団の中で育つため、大集団に入ると、気後れしてしまいやすいことが課題です。大勢の人の前でも、自分や地域のことを堂々と語れるようになってほしいと考え

ています」(吉岡課長)

同校は、少子化や過疎化の進行により、今年度から一部の学年で複式学級の学級編成となっていた。

「学校は地域社会の核であり、地域の人たちも学校の存続を強く願っています。そのため、豊かな自然を生かした教育や、少人数だからこそできるきめ細かな指導とともに、他校より半歩先を進んだ特色のある教育として、英語教育を先行して実施することにしました」(吉岡課長)

その英語教育の1つとして導入されたのが、**オンライン英会話授業**だ。これは、インターネット電話サービス「Skype(スカイプ)」を利用して、海外に住むネイティブ講師による少人数の英会話レッスンを受けるという授業で、この授業を通して、英語を流暢に操る力に加えて、コミュニケーションに対する意欲や態度を育むことを最も重視している。

「適切な言葉が出てこなくても、表情や身振り、手振り、相手に伝わることも多いものです。小学生の時からそうした経験を積み重ねていけば、外の世界に出た時にも、尻込みをせずに積極的に表現できるようになるでしょう」(吉岡課長)

ALTによる外国語活動も行っているが、ALTはある程度、日本語を理解できるため、子どもたちは困った時には日本語で伝えることができる。その点、オンライン英会話授業の講師は、日本語をあまり理解していない海外在住の外国人である。自分の英語が伝わらなかったり、相手の言葉が理解できなかったりと、本当に困った場面に遭遇してこそ、有意義な学習ができると考えている。

## 自分で工夫するからこそ 伝わる、分かる喜びがある

1回目のオンライン英会話の授業は、2016年5月に同校の5・6年

生を対象に行われた。子どもたちの姿を通して、教育委員会はどうのような手応えを感じたのか。

「子どもたちが自分の持つ知識を使って、精一杯、理解し、発信しようと、奮闘している姿が印象的でした。終了後に多くの子どもが『疲れた』と言っていました。脳をフル回転させ続けていたからこそ、そうした言葉が出てきたのでしょうか。自分なりに工夫して表現したり、コミュニケーションを取ろうとしたりする意欲や態度が身につく学習だと感じました」(笹尾指導主事)

ありったけの英語力で意思疎通を図ろうとすることで、子どもたちが「分かった!」「伝わった!」という喜びを感じる場面も少なくなかったと、吉岡課長は話す。

「今年度の3学期からは、同校の3・4年生でもオンライン英会話授業を行う予定です。今後、この授業を3年生から卒業までの4年間積み上げるとしたら、卒業時には相当な力がつくと感じています」

今後は、同校での成果を踏まえて、他校での実施や、同校と1小1中との関係にある天理市立福住中学校での実施も検討中だ。

「英語科教員がいる中学校では小学校とは少し事情が異なるので、授業の一部分に導入するなどの方法が考えられるかもしれません。その場合は、時間配分やレベル設定、1回あたりの人数なども再度検討する必要があります。また、2016年度末には、1年間の成果を検証するために、同校の5・6年生を対象に『GTEC Junior』\*を実施する予定です。その結果も踏まえて、次年度以降の英語教育のあり方を検討していきたいと思います」(吉岡課長)

実践を積み重ねる中で子どもの変容をしっかりと捉えた上で、次の施策につなげていく考えだ。

\*ベネッセから2016年冬リリース予定の、タブレット端末で受検する、小学生向けの4技能英語検定のこと。「できるようになったことへの丁寧な認め」でやる気高められることに加え、4技能別のスコアで英語力の伸びが継続的に確認でき、中学校以降の「使える英語」の素地も養うことをねらいとする。(以上は2016年6月現在の情報です。今後変更になる可能性があります)



## 学校現場の 実践

# 積極的にコミュニケーションする 意欲・態度を、オンライン英会話で育む

## 天理市立福住小学校



©1982（昭和57）年、2つの小学校が統合して開校。天理市東部の大和高原にあり、里山や田畑に囲まれる。田植えや森探検など、「氷室の郷土・福住」を知るための教育にも力を注ぐ。

校長 小西和子先生

児童数 37人

学級数 7学級（うち特別支援学級2、複式学級1）

電話 0743-69-2104

URL <http://ed.city.tenri.nara.jp/fukusumi-el/>

### 「疲れたけど楽しかった！」 20分間の英会話レッスン

5年生の3人は、パソコン画面の講師が話す英語を聞き取ろうと必死に耳をそばだてる。講師は子どもたちが聞き取りやすいようにはっきり発音しているが、話すスピードは普通の会話とあまり変わらない。子どもたちが知らない単語や表現も次々に出てくるが、何とか聞き取れた言葉をつなぎ合わせて理解しようと、子どもたちは一生懸命だ（写真）。

“○○chan, What is this?”と、講師に呼びかけられた子どもはテキストを見て、“This is basketball.”と緊張気味に答えた。“Very good!”と講師が満面の笑みで褒めると、子どもの表情がパッと和らぐ。その後も、

テキスト以外の会話も交えながら話をしていく。子どもがどうしても理解できずに会話が止まった時は、横についている担任がヒントを出す。

少しも気を抜けない濃密なレッスンが終わった後、子どもたちに感想を聞くと、「あつという間だった」「すごく疲れたけど、楽しかった!」「英語が通じたのがうれしかった」という声が笑顔とともに返ってきた。

天理市立福住小学校では、ベネッセと連携し、2016年5月、5・6年生でオンライン英会話授業\*を始めた。これは、インターネット電話サービス「Skype」を利用して教室と海外在住のネイティブの講師とをつなぎ、英会話の授業を行うというもの。月2～3回、1組約20分間のレッスンで、年間20回のプログラムとなる。



**写真** オンライン英会話授業を受ける5年生。ネイティブの講師が質問し、子どもが考えて話す場面が多く設けられた。3～4人が1組となり、1組約20分ずつ授業を受けた。Skypeの操作性を考慮し、今回はノートPCを使用した。今後は大型モニターの活用を検討している。

講師は規定の研修を受けた上で、授業に臨んでいる。また、テキストは『Hi, friends!』に対応し、それよりもさらに実践的な内容だ。授業の基本は1対1だが、同校では子どもの学齢を考慮し、1対3、もしくは1対4とした。そのため、子どもは気持ちに少し余裕を持って考え、講師と会話することができたようだ。

### 外国語活動を通して 深くやりとりする力を育てたい

同校の子どもは幼少期からあまり変わらない人間関係の中で育つため、初対面の人との交流に消極的という課題があった。そこで、2014年度から、相手の話をしっかり聞いて意見を述べ合う学習を国語の授業で行うなど、言語活動の充実を図ってきた。小西和子校長はこう説明する。

「言語活動の積み重ねにより、子どもたちは次第に自分の考えを表現できるようになってきました。ただ、もう一步踏み込み、相手の考えを引き出して、深くやりとりをする力はまだまだでした。そこで、国語科と並行して2016年度からは英語にも力を入れ、コミュニケーション力をさらに高めようと考えました」

子どもの英語への関心が高まっていたことも、外国語活動に力を入れる理由の1つだ。2015年度、5・6年生を中心に「総合的な学習の時間」で、世界各地を自転車で旅する冒険家の西川昌徳氏とのSkype授業を行った。その中で、西川氏が立ち寄ったニュージーランドの子どもたちと交流する場面があり、英語を話

\*ベネッセが提供する「Online Speaking Training」のこと。基本はSkypeを活用したオンラインでのマンツーマンのプログラムで、主に中・高生を対象に、学習指導要領に沿って開発された教材を用いてレッスンを行う。CEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）に基づき、レベルに応じて多彩なコンテンツを用意。

図4 福住小学校の英語教育

担任とALTとの チーム・ティーチング	全学年を対象に外国語活動の時間として実施。日本語を交えて子どもが楽しむことを重視した活動を展開。
オンライン英会話授業	5・6年生を対象に、月2～3回、年間20回実施予定。2016年度の3学期からは3・4年生でも実施予定。
モジュール学習	全学年対象。週3回、始業前の15分間に、学年ごとに活動中心の外国語活動を実施。各学年の発達段階を考慮した内容とし、次の学年の学習に無理なくステップアップできるようにしている。
イングリッシュアワー	2016年9月より実施予定。月1回、ALTを中心に、全校でゲームやダンスなどの活動を行う。異学年と交流することにより、自分から積極的にかかわろうとする姿勢を育むこともねらいとする。
その他	2016年9月から、ALTの来校が週3回に増えるため、外国語活動以外の授業にも入ってもらったり、休み時間に一緒に遊んだりして、子どもたちが英語や異文化に親しむ機会を増やす。

\*福住小学校の提供資料を基に編集部で作成

すこと、外国人とコミュニケーションを取ることに意欲が高まっていく姿が見られたのだ。そうした折、天理市教育委員会から「ICTを活用した英語教育推進事業」の打診があり、その一環としてオンライン英会話授業を実施することに決めた。

### 週3回、活動中心のモジュール学習もスタート

今年度の4月からは、週3日、始業前15分間のモジュール学習も始めた。低・中学年では、デジタル教材『ケンイングリッシュ』を使ってダンスや歌などで英語に親しみ、高学年では、『Hi, friends!』を基にゲームやリスニングなどを年間計画に沿って行う。外国語活動主任の深川瑛莉香先生はそのねらいをこう語る。

「短時間でも日常的に英語に触れるモジュール学習で、英語への抵抗感をなくし、学習への意欲を高めたいと考えています。また、高学年では、外国語活動の授業で理解が不十分だった箇所を重点的に扱い、定着を図ることで、子どもが英語に自信を持てるように努めています」

ALTとの外国語活動は、現在は各学年とも月1回だが、この9月からALTの来校が週3日に増える。そのため、他教科の授業に入ってもらったり、英語でゲームなどをする「イ

ングリッシュアワー」(月1回)を設けたりして、子どもが英語や異文化に親しむ機会を増やす予定だ(図4)。

### 多くのリソースを組み合わせ英語力や表現力を高める

オンライン英会話授業と外国語活動それぞれの位置づけについて、小西校長は次のように語る。

「外国語活動では、ALTは補助的な役割で、担任が主導して日本語も交えて楽しく活動することを目指しています。今後もこの形を継続する一方、オールイングリッシュのオンライン英会話授業では、積極的にコミュニケーションを取る力を養うとともに、より実践的な英語力を伸ばしていきたいと考えています」

1回目のオンライン英会話授業の様子を見た深川先生は、モジュール学習の内容とオンライン英会話授業とをうまく連動させることで、学習効果をさらに高めることができるのではないかと考えたという。

「授業では、“Can you ~?” など、学習していない表現も出てきます。子どもはやりとりの中で、何となく意味を感じ取って答えていました。モジュール学習でも同じ表現を扱うことで、より理解が深まるのではないかと思います」(深川先生)

英語教育の充実により、授業以外

でも英語を話す子どもが増えてきた。これをさらに、学校外にも広めたいと、山口忠幸教頭は語る。

「子どもが家庭で英語について話すことで、保護者や地域にも英語への関心が高まることを期待しています」

教員が外国語活動に意欲的になってきたことも、成果の1つだ。他方で、一連の活動をどう評価するかや、他学年の教員やALTとの連携をどう密にしていくかなどが、今後の課題だ。

また、奈良県には、奈良公園や大仏殿など外国人観光客が大勢訪れる名所や旧跡が多数ある。そうした場所を訪れて、英語を使って観光客と交流するといった活動も検討中だ。

「今回のオンライン英会話授業では、知らない表現があっても積極的にチャレンジして答えようとする意欲や態度が見られました。私が最も重視したいのは、相手に伝わる喜びを実感する中で、英語という言葉を楽しむこと。その視点を見失わないようにして、先生方や子どもたちと相談しながら取り組みを深めていきたいと思います」(小西校長)



校長  
小西和子  
こにし・かずこ

モットーは「子どもが笑顔でいられることが何よりも大事。そのために常に子どもの話に耳を傾ける」



教頭  
山口忠幸  
やまぐち・ただゆき

モットーは「楽しい学校をつくるために、子ども同士のコミュニケーションを大切に」



教諭  
深川瑛莉香  
ふかがわ・えりか

外国語活動主任。5学年担任。モットーは「一人ひとりの個性を尊重し、その子どもの良さに寄り添った指導をする」

# ファンクショナルバイリンガル育成に向けた10年の歩み

## 京都府・私立 立命館小学校

2006年に開校した立命館小学校は、「真の国際人の育成」を教育方針に掲げ、独自の英語教育を展開している。小学校・中学校・高校の12年間を見据えた指導を行い、小学校は「ファンクショナルバイリンガル」の基礎を築く段階として、子どもの英語力の引き出しをたくさんつくる活動を行ってきた。教材と指導案をゼロからつくり上げ、改善を重ねてきた歩みは、教育委員会や公立校にも参考になると思われる。



◎ 2006（平成18）年開校。2つの大学、4つの中高一貫校、1つの小学校を有する立命館学園の1校。教育方針に「確かな学力」「真の国際人」「豊かな感性」「高い倫理観と自立心」の育成を掲げる。

校長 成山治彦先生

児童数 720人 学級数 24学級

電話 075-496-7777

URL <http://www.ritsumei.ac.jp/primary/>



副校長

**蔭山成利**

かげやま・なりとし

立命館慶祥中学校・高校副校長、学校法人立命館一貫教育部部長、立命館中学校・高校副校長を経て、2016年度から現職。



教諭

**三ツ木由佳**

みつぎ・ゆか

英語科主任。設置準備室の時から英語のカリキュラム開発に携わる。大学院では小学校英語授業のあり方を研究。

### 英語教育の目標

#### 自分の必要に応じて英語を使える力の基礎を育む

京都市北部に位置する立命館小学校は、2006年の開校時から教育方針の1つに「真の国際人の育成」を掲げ、英語教育に力を入れている。その英語教育の目標は、立命館中学校・高校と連携した12年間一貫教育において、「ファンクショナルバイリンガル」と言える人材を育成することだ。蔭山成利副校長は次のように説明する。

「ファンクショナルバイリンガルとは、状況や場面に応じて、英語をツールとして使える人材という意味です。生徒の将来の夢や目標、また、高校卒業後の進路は多様です。それぞれの生徒が自分の必要に応じて、様々なシーンで英語をコミュニケーションの手段として使えるようになることを目指しています。小学校はその基礎を育む段階という位置づけです」

同校の設置準備室の時から在籍し、英語カリキュラムの開発を担当している英語科主任の三ツ木由佳先生は、次のように語る。

「今でこそ小・中・高で連携した教育が進められていますが、開校当初はどのような授業をするのか、全く決

まっていませんでした。本当に手探りで、あらゆる教材を集めましたが、そのまま使えるものはほとんどなく、結局作った方が早いと、夜遅くまで工作する日々が続きました。そして、子どもたちの反応を見ながら、『この内容は良かった』『この教材はここを作り直そう』と、同僚の先生方と試行錯誤を重ねました。まさに、今の立命館小学校の英語教育（図1）は、子どもたちから我々も学び、つくり上げてきたと言えます」

開校から10年を経て、同校の目標は具現化されつつある。2016年3月に立命館高校を卒業した同校の1期生\*の中には、海外の大学に直接進学する生徒が現れた。

「オーストラリアの大学に進学する生徒は、自分が学びたいデザインについて教えてもらえる大学が外国にあることが分かった際に、英語で学ぶという不安を感じて選択を躊躇することはなかったとのことでした。それこそが、まさに私たちが目指してきた子どもの姿であり、ファンクショナルバイリンガルが本当に育っていることを実感し、感慨深かったです」（三ツ木先生）

同校の英語の授業時数は、低学年が週2コマ、中学年が週3コマ、高

\* 2006年4月、小学1～3年生の児童で開校した。2009年度に全学年がそろった。

学年が週4コマだ。ほかに毎朝のモジュールタイムもあり、6年間で約600時間となる。担当教員は英語科専任で、日本人教員4人、ネイティブ教員5人が在籍する。そうした点は私立ならではの環境だが、授業の構成や教材作りの考え方は、公立校での指導にも生かせるポイントが多い。

### 授業の進め方

## 集中力が続くよう、短時間でテンポよく、多様な活動を

授業は、日本人教員とネイティブ教員のチーム・ティーチングで、1年生からオールイングリッシュで進める。その特徴は、1コマ45分間の中で4～7種類の短時間の活動をテンポよく行うことだ。例えば、歌を歌い、カードを用いたフォニックスを行い、前時に学んだ語彙を使ったクイズで楽しんだ後、絵本の読み聞かせをして、再び歌を歌うという活動が展開される。三ツ木先生は、子どもが最後まで集中して英語を聞き続けるための工夫が大切だと説明する。

「子どもに英語を聞く耳と聞く態度を育むために、教員はすべて英語で話し、大量にインプットするようにしています。しかし、子どもが45分間集中力を保って、母語ではない英語を聞き続けることは難しいものです。だからこそ、種類の異なる活動を短時間でいくつもを行い、子どもが気持ちを切り替えて、飽きずに学べるようにしています」

短時間でも、歌、音読、クイズ、ゲーム、ロールプレイなどの多種多様な活動があれば、子どもは得意な活動や好きな活動を見つけやすい。例えば、活動的なゲームばかりでなく、読み聞かせを行うことで、言葉に加えて絵の助けによって物語にぐっと入り込み、内容を理解できる子どももいるという。なおかつ、多様な活

図1 立命館小学校 英語教育の特色

1	口頭での大量のインプット	授業は日本人教員とネイティブ教員のチーム・ティーチングで、オールイングリッシュで進める。2人の教員が子どもに大量の英語を浴びせ、英語を聞く習慣と理解するストラテジーを育てる。
2	文字を音声化できるための指導	カタカナがなくても、英語を音読し、意味につなげられるように、1年生から文字に触れさせ、段階的に英語でのリテラシー能力を育てる指導を行う。
3	コミュニケーション活動(話す・書く)、及び読む活動に必要な部分だけを拾って教える構文・文法指導	体系的に細部まで学ぶ文法学習ではなく、コミュニケーションの中で使用するための文法を発達段階に合わせて指導する(Be動詞、一般動詞、過去、未来、3単元のs、比較、関係代名詞、完了形など)。
4	たくさん読んで理解させる指導	子どもの興味と知的レベルに合った教材を用いて、読む機会をたくさん設ける。
5	英語を使う体験・喜びを生むイベント	毎年9月に「ワールドウィーク」を実施。立命館アジア太平洋大学の国際学生15か国・約30人が全クラスに入り、学校生活を1週間共にする。協定校への語学研修や留学、また、協定校からの訪問交流なども実施する。

1～5の結果として、英語や異文化(自文化)を学ぶことへの意欲、動機づけに結びつく。

\*立命館小学校提供の資料を基に編集部で作成

動は、聞く、話す、読む、書くという様々な力を伸ばすことにもつながる。

子どもの状況の把握も大切だ。

「1時間目の授業と給食後の5時間目の授業とでは、子どもの集中力はまるで違います。授業で伸ばしたい力を意識するだけでなく、子どもの様子をよく見取り、子どもの好みや時間帯なども考慮しながら、授業を組み立てています」(三ツ木先生)

### 教材作りのポイント

## 「表現したい」という思いをいかに活動に組み込むか

教材作りでは、子どもにとって意味のあるやりとりになっているかを重視する(P.28図2)。自分のことやテレビ・新聞で見聞きしたこと、授業で習ったことなど、「本当の情報」であるからこそ、子どもは「言いたい」「聞きたい」と思うのだと、三ツ木先生は強調する。

「日本人の子どもたちをアメリカ出身とイギリス出身のグループに分け

て、互いの出身地を尋ね合う活動をしたところで、子どもの学習意欲を引き出すことはできません。1年生であれば、友だちの誕生日や自分の好きなものを尋ね合う方が意欲を持って活動します。子どもの表現欲求を教員がくみ取り、表出できるような内容にすることが重要です」

また、子どもが学習内容に関心を持てるようにするため、時期に適した内容にする工夫をしている。同時期の他教科の学習内容と関連性を持たせたり、クリスマスの前であれば



写真1 1年生では、自己紹介をしながら自分の名前を書いたName Cardを交換。自分のクラスで練習した後、2クラス合同の授業を行った。

欲しい玩具と want を用いた表現を取り入れたりもする。

学年間の連続性という観点では、一度扱った内容を、設定を変えたり新しい語彙を加えたりしながら、何度も登場させる。例えば、1年生で野菜の名前を覚えたら、2年生ではカレーのお気に入りの具材を考える活動で復習し、3年生では京野菜の名前を新たに学習し、理科で学習する植物の内容を絡ませて、深く考えられるような内容にするという。

「子どもが既に持っている知識や言葉を使いながら、その周辺を広げていく学習内容にしています。バリエーションが増えれば、次に違った形で出てきても、自分なりに推測し、また自分の言葉で何とか伝えようとするようになります」(三ツ木先生)

同じ内容でも、表現方法を徐々に難しくして、表現力を高めていく題材もある。例えば、「自分の小さい頃を紹介する」場合、過去形を学ぶ4年生では、教員自身の話を聞いて選択肢の中から語彙を選ぶ活動を行って文章に慣れた後、次のステップとして、自分自身について空所補充形式で単語を書き込む。中学1年生では、子どもの頃をテーマにした英作文を書くといった具合だ(図3)。中学校で書くことが急に増えないよう、少しずつ積み重ねている。

このような考えの下、教材は作られているが、目の前の子どもたちの知識や経験、関心の変化をつかむ努力をし、さらには、時事や流行も取り入れながら、教材の内容は常に見直しているという。

### 英語に関する特別活動

## 「本物に触れる」ことが学習意欲を高め、力を伸ばす

学習した英語を授業以外で使う体験や喜びを生むイベントも数多く設

図2 教材づくり 5つのチェックポイント

1	自分自身についての内容か	自分のことを話すとなると、内容を真剣に考えやすい。高学年になるほど、人と少し違うことを言いたいという欲求も生まれ、それが伝えたいという意欲につながる。
2	本当の情報か	仮定の内容を基にした活動だと、どうしても不自然になり、子どもはしらけるだけ。学習意欲も湧いてこない。
3	他教科の学習内容や季節に合った内容など、時期的に適しているか	子どもが同時期に他教科で習ったことを題材にすると、関心が湧き、知っていることを言いたくなる。また、季節的に話題になる事柄を取り上げると、興味が向きやすい。
4	「その会話、やりたい!」と感じさせることができるか	子どもが「やりたい」と思えば、主体的に取り組み、定着も期待できる。○分以内、○人とやるなど、タスクを加えると、目標が明確になり、意欲も高まる。
5	不自然な状況を無理に設定していないか	「飛行機の中」など、無理がある設定では、子どもは必要性を感じず、単なる遊びになりやすい。外国の人々と通じ合うための英語を学ぶ場となるような活動内容にする。

\*立命館小学校提供の資料を基に編集部で作成

図3 教材の展開例

\*立命館小学校提供の資料をそのまま掲載

「自分の小さかった頃」では、教員自身の話を聞き、聞き取った語彙を選択肢の中から選ばせる。次に、教員の例を参考に、子ども自身の情報を書き込ませる。選択肢を与え、使いたい語彙を選ばせて完成させる。中学1年生は、教員の例文を参考に、自分で英作文をする。同じテーマでも、それぞれの段階に応じたステップを設けることで、活動の幅は広がる。

けている。最も特色ある活動は、毎年9月に行う「ワールドウィーク」だ(写真)。これは、同じ学校法人の立命館アジア太平洋大学(APU)\*1の国際学生約30人が、児童宅にホームステイをしながら小学校に通い、1週間、児童と共に学校生活を送る

というものだ。国際学生の出身国は、アジアやアフリカ、東欧、南太平洋地域などの15か国にも上る。

「国際学生には自国の文化や生活を紹介してもらい、自分の夢も語ってもらいます。国費で留学している国際学生も多く、国を背負って立つと

\*1 大分県別府市にキャンパスがある。学部生約5,600人のうち約2,600人が国際学生であり、約80か国・地域から留学している。教員の約半数も外国籍。

\*2 科学技術や理科・数学教育を重点的に行う高校を支援する事業。 \*3 国際的に活躍できる人材育成を重点的に行う高校を支援する事業。

## 写真 世界15か国、約30人と学校生活を送る「ワールドウィーク」



- ① 文化交流会では、国際学生が民族衣装に身を包み、舞踊や民謡などを披露。
- ② 国際学生は各クラスに入り、子どもと一緒に授業を受けたり、特別講師になったりする。5年生の社会科では、国際学生が出身国と日本との輸出入品についてプレゼンテーションをして、貿易についての理解を深めた。
- ③ 国際学生を兄のように慕う子どもも見られるという。

いう志の高さに刺激を受ける子どももいます。まさに、多様な文化、様々な思いを持つ人に触れる1週間になります」(蔭山副校長)

期間中には、6年生が3～4人のグループとなり、国際学生を案内する「京都deガイド」も行う。国際学生の質問に答えられるように調べ学習をし、事前に英語の原稿を用意する。この活動は国際学生に大変好評で、子どもにとっても自分が住む町をよく知る機会になっている。

このような「本物に触れる」方針は、立命館中学校・高校にも貫かれている。特に、高校は、文部科学省「スーパーサイエンスハイスクール」\*2、及び「スーパーグローバルハイスクール」\*3の指定校として課題研究を行っているため、その成果を海外の高校生に英語で発表し、質疑応答をするという機会が多い。小学校から培ってきた英語力をまさしくツールとして活用する場面であり、そうした活動の積み重ねが、英語学習の動機づけとなっている。

## 小・中・高連携の体制

## 小・中間の教員異動で、学習歴と英語力を把握

最後に、小・中・高の連携体制について見ていこう。

立命館小学校、立命館中学校・高校では、12年間を発達段階に応じた4-4-4の3ステージに設定して、カリキュラムを組んでいる。英語教育では、セカンドステージとなる小学5年生～中学2年生の接続を大切にしており、中・高の教員が小学校での指導内容や、英語力の定着具合を把握した上で、指導に反映している。連携を始めた頃は、中学校の英語科教員が小学校に異動して高学年を受け持ち、児童の中学校進学に合わせて教員も中学校に持ち上がり異動するという体制を採っていた。

「最も大事なのが、教員間の連携です。ノウハウが蓄積された今は、校種間の異動は減りましたが、小・中・高は互いによく授業見学をしますし、教材も共有しています。中学校教員

から、小学校での指導内容への問い合わせもあります」(蔭山副校長)

三ツ木先生も、教員同士が連絡を密にすることが大切だと話す。

「例えば、小学校では文法事項を扱いますが、体系立った指導はしていません。子ども自身は『分かっている』と思っけていても、中学校の教員にとっての『理解している』というレベルに達していないことがあります。『～ができています』といっても、捉え方が小・中・高の教員で異なるからです。そのような食い違いをなくすためにも、直接の対話が必要です」

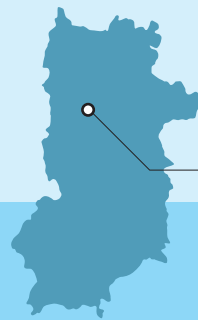
今年度は、英語教育の共通の指標として、12年間のCAN-DOリストをCEFR\*4に基づいて作成している。

「指導ノウハウのなかった小学校では教員間で目標を共有するCAN-DOリストが必要でした。連携が進むにつれ、指導法が確立していた中・高でも4技能の目標を文章化し、12年間の指導の体系化を目指しています」

開校以降、独自の英語教育を積み重ねてきた立命館小学校。今後の課題の1つは、カリキュラムと教材のさらなる見直しだ。開校当時と異なり、民間の幼児英語教室などが増えたことにより、入学前に英語を学ぶ子どもの割合が増え、現在はそれに応じた指導の見直しを進めている。また、2015年度には小学校の1期生が高校を卒業し、小・中・高の連携はこれからが真価を問われる。

「先日、高校生が小学校で行った特別授業で、小学校で英語を学んだ経験は自分にとって大きな財産になったという話を聞き、流暢な英語でスピーチをする姿を見て、感慨深い思いを抱きました。私たちの指導の成果は、中学校、高校と進学した生徒が物語ってくれます。その姿を励みに、これからも指導を改善し続けたいと思います」(三ツ木先生)

\*4 ヨーロッパ言語共通参照枠 (Common European Framework of Reference for Languages) の略称。学習指導教材の編集、外国語運用能力の評価などのために、包括的な基盤を提供するものとして、2001年に欧州評議会が発表。A～Cごとに2レベル、計6レベルが設定されている。



第2回 | 奈良県明日香村

# 「輝け！ 明日香っ子」 幼小中連携が第2ステージに！

高松塚古墳や石舞台古墳など、飛鳥時代の古墳が多数点在する奈良県明日香村では、2003年度、幼稚園、小学校、中学校の一貫教育に着手した。

当初は難しかった学校種を超えた連携だが、「郷土を語れる子ども」の育成を目指し、12年間一貫の英語教育や郷土学習、合同の職員研修などを展開している。

明日香村教育委員会  
学校指導主事  
しもずみたけし  
**下住剛士**さん

## 奈良県明日香村

多くの都が6～7世紀に村周辺の地域に生まれ、政治・文化の中心地として栄えていたとされる。村全域に古墳が点在し、自然と文化遺産の保護を目的とした国営飛鳥歴史公園を有する。

- 人口 5,732人
- 面積 24.10km<sup>2</sup>
- 幼稚園1園 小学校1校 中学校1校
- 園児児童生徒数 435人
- 電話 0744-54-3636
- URL <http://www.asukamura.jp/education/index.html>



教育委員会の同僚と事務局にて。

## 幼・小・中の教員が集まり 率直に語り合う

明日香村教育委員会が、村立の明日香幼稚園、明日香小学校、聖徳中学校の一貫教育を始めてから2016年度で14年目になる。ねらいは、少子化の進行に対応しながら、教育の充実を図ること。目指す子ども像は、「郷土を知り、郷土を愛し、郷土に誇りを持ち、郷土を語れる子ども」「夢に向かって、自らの生き方を切り開く意欲のあるたくましい子ども」だ。

今では、村教委と各校の教員、保護者、地域の代表者による推進組織が整えられ、「英語教育」「郷土学習」など、6つの柱で一貫教育が進められている。年間計画も立てられ、各園校の教員が参加する週1回の会議

では、それぞれの実践を共有し、課題があればすぐに話し合う。

今年度、村教委の幼小中一貫教育担当に着任した下住剛士学校指導主事が何よりもすごいと感じたのは、幼・小・中のどの教員も12年間を見通した教育の必要性を理解して、明日香村の教育を考えていることだ。

「週1回の会議に参加するのは管理職ではありません。各園校の現場教員が自ら課題意識を持って出席し、幼・小・中に在籍する村の子ども一人ひとりの名前を出しながら、成長した点や課題に感じる部分について率直に話し合っています。まさに、学校種を超えて『村の子どもたちの課題』と捉えて共有していることが、大きな強みになっているのです」

先日は、箸の持ち方の指導が課題

に上った。幼稚園では給食が出るため、そこで箸の持ち方をしっかり教えれば、小学校での給食指導がスムーズになる。さらに、箸の持ち方は鉛筆の持ち方にも影響するため、鉛筆も正しく持てるようになることが期待できるという意見が交わされた。

このように、基礎的な生活力が学力にもつながるといった意識もまた、幼・小・中の教員間に浸透している。

## 連携が進んだきっかけは 地域住民のあいさつ運動

実は、2009年度に教育課程特例校制度を受け、幼・小で英語活動を始めたが、それだけでは連携の真の重要性が理解されず、取り組みは進まなかった。そこで、村教委が地域に協力を求めて、2013年に始まった

## 幼・小・中交流音楽会



奈良県教育週間に幼・小・中交流音楽会を開催。村の子ども全員で合唱し、中学校の吹奏楽部は演奏も披露。保護者や地域の人が多数来場した。

## 地域の人たちと あいさつ運動

あいさつ運動は地域挙げての活動だ。幼稚園児も大きな声で「おはようございます」と地域の人たちにあいさつをする。



## 合同研修や合同会議を 定期的に実施

幼・小・中の合同研修は年4回実施。また、幼小中一貫教育推進委員会の会議は週1回開く。各部会の会議も同日に開催し、連携を図っている。



## 英語教育



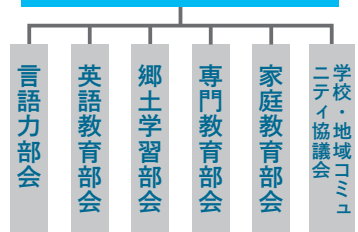
英語教育と郷土学習では、村独自に12年間のカリキュラムを作成。幼・小・中の学習の接続と、学習効果の検証を行う。子どもたちは学習の成果を生かし、外国人観光客のボランティアガイドを務める。

## 12年間一貫 独自カリキュラムを構築

## 郷土学習



## 幼小中一貫教育推進委員会



のがあいさつ運動だ。「明日香村の子どもとして、生活の基本であるあいさつをしっかりできるようにしよう」と、地域の人々が登校時間に通学路や校門に立ち、子どもにあいさつをし始めた。そうなると学校も動かざるを得ない。全園校の教員が校門に立つようになり、学校間の対話が進むようになった。2014年度には文部科学省「英語教育強化地域拠点事業」の拠点校となり、12年間の独自カリキュラムと教材を作成した。

郷土学習にも力を入れる。幼稚園は「あすかのたんけん」、小学校は「あすか科」、中学校は「明日香学」を設け、地域の自然、歴史、文化、産業などを系統的・総合的に学んでいる。

また、小学5・6年生の理科・図画工作・音楽（音楽は4年生も）は、

中学校教員が指導しており、2015年度からは小・中学校の全教員に兼務辞令が発令されている。

これらの取り組みを通して幼・小・中の対話を積み重ね、時間をかけて相互理解を図っていった。下住指導主事は、奈良県教育委員会の指導主事や小学校校長を務めた経験から、小中連携の重要性も、それを進めていく難しさも十分理解している。

「現場の教員は目の前の子どもに全力投球で、長期的な展望を持って指導することはなかなか難しいものです。また、幼・小・中は学校文化が異なるために、互いに理解しにくい面もあります。しかし、明日香村ではそうした壁を超えることができました。今は、一貫教育の良さを真に発揮していく第2ステージに入っています」

## 子どもが幼・小・中の壁なく、 成長していくために

成果はじわじわと表れ、児童・生徒数は前年度より14人増えた。下住指導主事は県内の教育委員会で幼小中連携の状況を聞かれるなど、周囲の関心も高い。次期学習指導要領では英語教育やアクティブ・ラーニング、カリキュラム・マネジメントと、明日香村が取り組みを進める内容が一層重視される。教員の負担感を軽減しつつ、子どもが感じる学校種の壁をできるだけ低くするような連携を図りたいと、下住指導主事は語る。

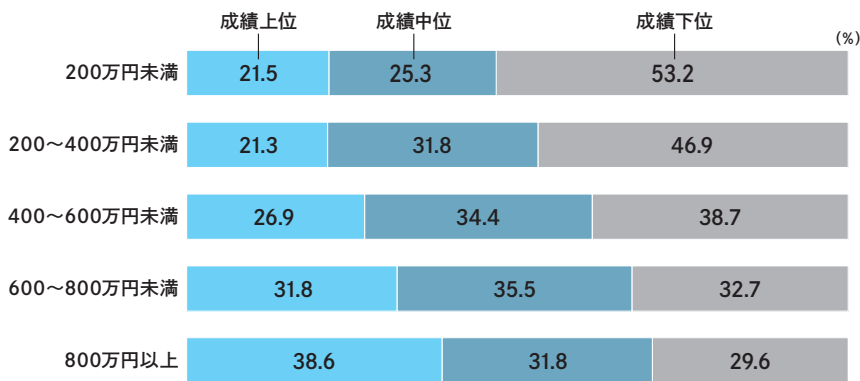
「私自身は担当1年目。教員や子ども、保護者や地域の人とたくさん話し、連携をどう深化させていけばよいかを考えていきたいと思います」

# 子どもの学びや成長に影響することとは？

今回取り上げるのは、小・中学生の生活と学びに関するデータです。特に、子どもの学びや将来への意識に、保護者のかかわり方や日ごろの経験がどのように関連しているかをデータでご紹介します。

## 1 世帯年収が下がるにつれて、「成績下位」が増加

図1 世帯年収別にみる子どもの学校の成績（小学4年生～中学3年生）



注1) 成績は、国語、算数・数学、理科、社会、英語（外国語）[小学生は英語（外国語）を除く4教科]について、それぞれ5段階で子どもに自己評価してもらったものを合計し、学校段階ごとに上位・中位・下位に3等分したものを、いずれかの教科に無回答・不明の人は除いている（図4も同様）。

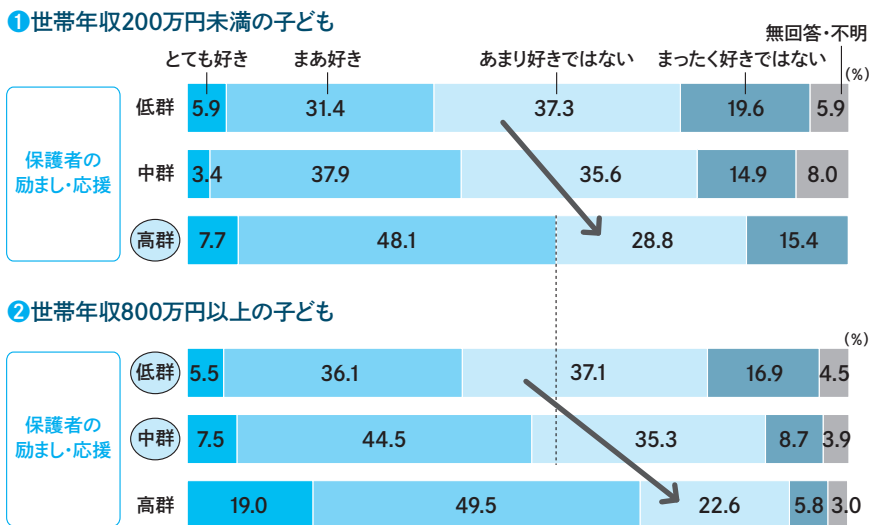
注2) 世帯年収は、保護者の回答。「答えたくない」、無回答・不明の人は除いている。

家庭の社会的背景（世帯年収、保護者の学歴・職業など）と子どもの学力との関係は、これまで多くの研究<sup>\*</sup>で指摘されてきた。このような関係は今回の調査でも同様に見られ（図1）、家庭の世帯年収が低い子どもの方が「成績下位」の比率が高いという結果となった。この結果には、学校外の教育（習い事、学習塾、教材費など）にどれだけお金をかけられるかなどが影響していると思われる。

<sup>\*</sup>例えば、文部科学省委託研究「平成25年度全国学力・学習状況調査（きめ細かい調査）の結果を活用した学力に影響を与える要因分析に関する調査研究」（国立大学法人お茶の水女子大学、2014年3月）では、家庭の社会的背景（SES）が高い子どもの方が各教科の平均正答率が高い傾向が見られたと分析している。

## 2 保護者の励まし・応援は、子どもの勉強の好き嫌いに影響

図2 保護者のかかわり別にみる子どもの勉強の好き嫌い（小学4年生～中学3年生／世帯年収別）



注1) 勉強の好き嫌いは、「あなたは（勉強）がどれくらい好きですか」と尋ねている（図3も同様）。「好き」（とても+まあ）の比率は、世帯年収200万円未満の子ども全体では43.5%、世帯年収800万円以上の子ども全体では56.2%。

注2) 保護者の励まし・応援は、お父さんやお母さんが「いいことをしたときにほめてくれる」「失敗したときにはげましてくれる」「やりたいことを応援してくれる」かどうかを、それぞれ4段階（とてもあてはまる～まったくあてはまらない）で子どもに回答してもらったものを合計し、高群・中群・低群に3等分したものを、いずれかに無回答・不明の人は除いている。

注3) 世帯年収が200万円以上～800万円未満の人、「答えたくない」、無回答・不明の人は除いている。

しかし、家庭の世帯年収だけが、子どもの成績や勉強への意識に大きく影響を及ぼしているわけではない。

図2①②を見ると、年収にかかわらず、保護者の励まし・応援を受けている子ども（高群）の方が「勉強が好き」（とても+まあ）の比率が高く、保護者の励まし・応援などの肯定的なかかわりは、子どもの勉強の好き嫌いに関連している。

また、図2の①と②を比べてみると、「勉強が好き」（とても+まあ）の比率は、世帯年収200万円未満の子どものうち、保護者の励まし・応援「高群」（55.8%）の方が、世帯年収800万円以上の「低群」（41.6%）、「中群」（52.0%）より高いことが分かる。

保護者の肯定的なかかわりは、世帯年収による子どもの学力格差を克服する手段となる可能性がある。

「子どもの生活と学びに関する親子調査 2015」

東京大学社会科学研究所とベネッセ教育総合研究所が共同で立ち上げた「子どもの生活と学び」研究プロジェクト（親子パネル調査）の第1回調査（調査時期／2015年7～8月）。小学1年生～高校3年生の親子約2万1000組に調査し、子どもの成長のプロセスや成長に必要な環境・働きかけを明らかにする。今後、毎年調査を行う予定。

◎詳細は下記ウェブサイト（プロジェクトの進行状況）をご覧ください。  
<http://berd.benesse.jp/special/childedu/>

ベネッセ教育総合研究所  
 研究員

橋本尚美

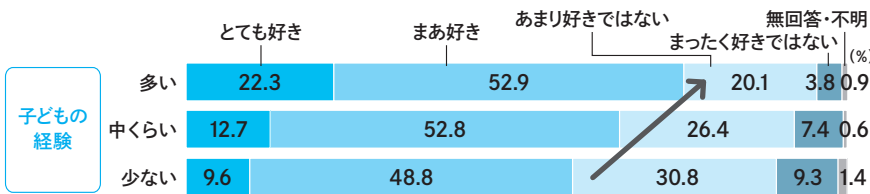
はしもと・なおみ

初等中等教育領域の子ども、保護者、教員を対象にした意識や実態の調査研究を担当。子どもの文化世界や学びの実態、子どもの成長環境としての社会・学校などに関心を持っている。



### 3 多様な経験が子どもの学びや成長を促す

図3 子どもの経験量別にみる勉強の好き嫌い（小学4～6年生）

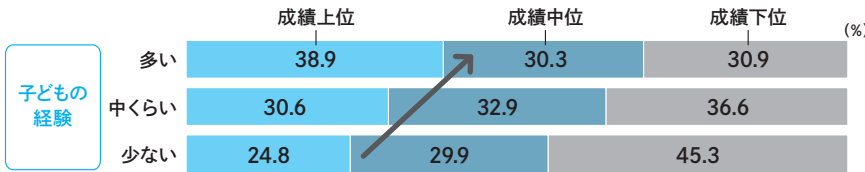


日ごろの経験が勉強や意識に影響

子どもの日ごろの「行動」面の経験も、子どもの成績や意識と関連するようだ。

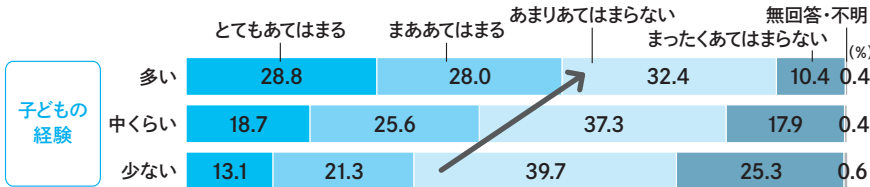
図3（小学生データ）を見ると、家で季節の行事をする、自然の中で思いっきり遊ぶ、小さい子どもの世話をする、無理だと思うようなことに挑戦するなど、日ごろの経験が「多い」子ども（75.2%）の方が、「少ない」子ども（58.4%）に比べて、「勉強が好き」（とても+まあ）の比率は高い。小学生のうちに多様な経験をして、勉強が好き、楽しいといった意識を高めておくことは大切だろう。

図4 子どもの経験量別にみる学校の成績（中学生）



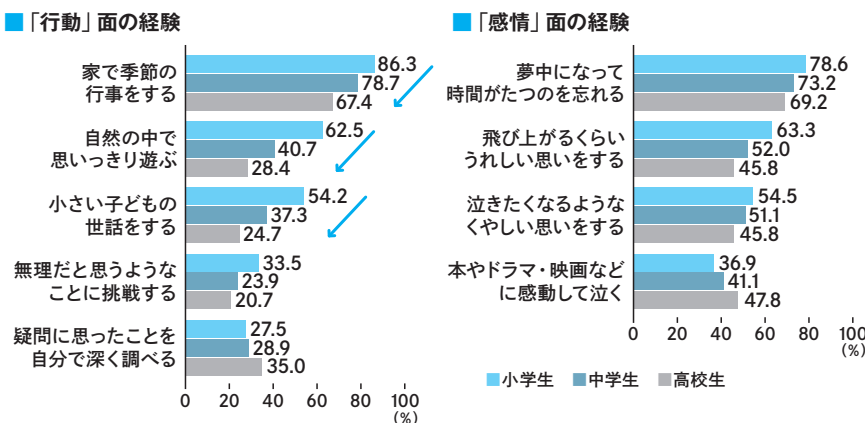
また、図4、5（中学生データ）を見ると、日ごろの経験は、成績や将来への意識とも関連しており、「将来の目標がはっきりしている」（とてもあてはまる+まああてはまる）と回答した比率は、経験が「少ない」子どもが34.4%であるのに対して、「多い」子どもは56.8%である。中学生においても、日ごろの経験が大切であることを示している。

図5 子どもの経験量別にみる「将来の目標がはっきりしている」かどうか（中学生）



注1) 子どもの経験は、この1年くらいの「行動」面の経験（家で季節の行事をする、自然の中で思いっきり遊ぶ、美術館や博物館に行く、地域の行事に参加する、小さい子どもの世話をする、疑問に思ったことを自分で深く調べる、無理だと思うようなことに挑戦するなど14項目）の有無について、子どもに複数回答で回答してもらったものを合計し、学校段階ごとに多い・中くらい・少ないに3等分したもの（図3～5）。  
 注2) 「将来の目標がはっきりしている」かどうかは、子どもに「あなた自身のことについて、次のことはどれくらいあてはまりますか」と尋ねている（図5）。

図6 学校段階による子どもの経験率の変化（小学4年生～高校3年生）



注) 複数回答。

肯定的なかかわりを促す努力を

このような日ごろの経験の多くは、学校段階が上がるにつれて減少する傾向にあるため（図6）、小・中学生のうちに様々な経験をさせておきたい。「行動」面だけでなく、「感情」面の経験も、子どもの成長を促す重要な要素だろう。

また、保護者や周囲の大人の肯定的なかかわりや、子どもに多様な経験を促すことは、子どもの学びに向かう力や学力に大きな影響を与えることができる。教育委員会や学校は、子どもに対するこのような保護者や周囲の大人のかかわりをサポートしていくことが大切だろう。

どう変わる？

どう備える？

# 5年後の 英語教育



## 第②回

# 「完璧な英語」より、生徒が アクティブに取り組む授業を

前号では、中学生の英語力が文部科学省の目標とは大きな隔たりがあること、教員は言語活動の必要性を理解しながらも、授業で十分行えずにいることが課題であると紹介した。では、どのようにすれば、英語の4技能を育む指導に転換できるのだろうか。根岸先生にそのポイントを聞いた。

東京外国語大学大学院総合国際学研究院 教授 **根岸雅史**

ねぎし・まさし◎東京外国語大学卒業後、東京学芸大学大学院教育学研究科修士課程修了、レディング大学大学院言語学研究科修士課程修了。レディング大学より博士号取得。専門は英語教育学、言語テスト、言語能力評価枠組み。公立高校講師、東京外国語大学助手などを経て、現職。主な著書に『無責任なテストが「落ちこぼれ」を作る』（共著、大修館書店）など。

### 授業中に生徒一人ひとりが 英語で言語処理をしているか

英語の4技能を育むための授業として、私が最も重視すべきだと考えるのは、生徒一人ひとりがアクティブに英語で言語処理を行えるようにすることです。英語を聞いて、読んで、その内容をイメージする。または、自分の言いたいことを考え、それを英語で書いたり話したりして言語化する。これら一連の過程を即興的に繰り返し行うことによって、英語4技能は身につけていくからです。

授業では、先生方が様々に工夫して言語活動を行っていると思いますが、それらの活動は、生徒がその場で考えて、英語で言語処理をする内容となっているのでしょうか。例えば、生徒が教科書を音読し、和訳する場面では、指名された生徒以外は発表を聞いているだけです。もしかしたら、指名された生徒でさえ、予習してきた和訳をただ読み上げているだけかもしれません。一方、少人数のグループで教科書を読み、そのトピックスについて英語で話し合い、意見

をまとめて発表する活動では、どの生徒も英語を聞き、話すこととなります。この前者と後者の活動をそれぞれ続けると、卒業時の英語力にどのような差がつくかは明白です。

### 「完璧な英語でなければ」 という思い込みを捨てる

特に「書く力」「話す力」は、他の成績にあまり関係なく、書いて話す量に影響されることが、様々な調査から分かっています。実際、日常的に英文を書く活動をしている中学校で、留学生のスピーチの要旨を英文にまとめさせたところ、英語の成績が下位の生徒でも10行以上は書き、スペリングや文法のミスはあっても、内容的には十分なものでした。

英作文を指導する上で、大変なこととしてよく挙げられるのが「添削」です。しかし、先生が丁寧に添削しても、赤が多ければ、かえって生徒は意欲を失うだけです。それよりも、たくさん書かせることを重視して、内容を読んで励ましの言葉を書くなど、生徒に次も書こうという意欲を持たせる方が大切です。また、学期

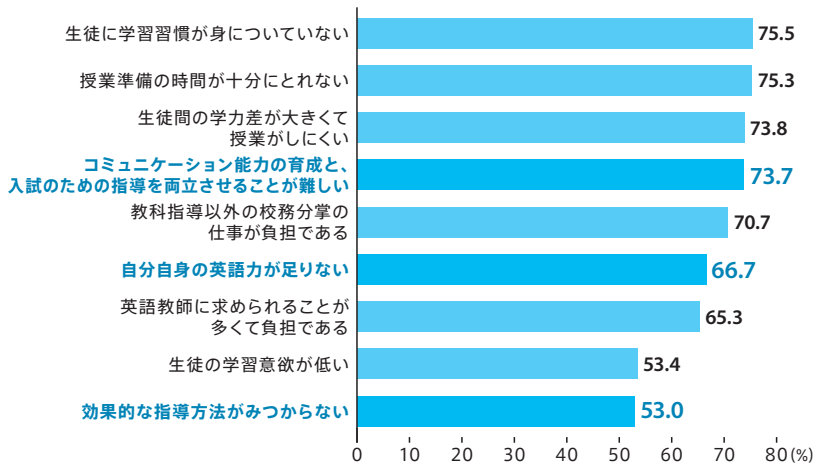
に1回、イベント的に英字新聞を制作させるよりも、間違ってもよいから毎日少しずつでも書かせる方が、書く力ははるかに伸びていきます。

「話す力」の指導も同様に、量を増やすことが大切です。話す際には、内容を決め、それらを言語化し、音声化します。日本人は母語でも議論が得意とは言い難いですから、英語であればなおさら大変です。だからこそ、予習してきた英文を読み上げるのではなく、考えながら話す練習を積むことに意味があります。ただ、即興的であればあるほど、単語の羅列だったり、文法がめちゃくちゃだったり、言葉はたどたどしくなってしまう。しかし、そうした事態を避けるために、話す活動を控えているのであれば本末転倒です。

言語の習得過程では、たどたどしいやりとりをする段階が欠かせません。完璧な英語を書いたり、話したりしなければならぬという思い込みを捨て、授業は試行錯誤しながら、時には失敗も披露する場であるという意識への転換が必要だと思います。

もう1つ、意識の転換が必要だと

図1 英語指導に関する悩み（中学校教員）



\*「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%。上位9項目を抜粋。  
出典/ベネッセ教育総合研究所「中高の英語指導に関する実態調査 2015」

考えるのは、入試指導との兼ね合いです。先生方の指導に関する悩みの上位には「コミュニケーション能力の育成と、入試のための指導を両立させることが難しい」が入っています(図1)。しかし、英語力という幹がしっかり育っていないところに、入試テクニックなどの枝葉を育てようとしても身につくものではありません。幹の成長には時間がかかりますから、1年生から英語の4技能を育成していき、入試に必要なノウハウは3年生の後半あたりから指導すればよいのではないのでしょうか。

## 英語力を伸ばす研修と指導法の研修の2本立てに

先生方がそうした指導を行えるように、研修内容を今一度、見直すともよいかもかもしれません。前号で述べた通り、英検準1級相当の力を持つ中学校教員は3割弱で、多くが英検2級相当と思われる。英語力はすぐに伸びるものではありませんから、英語力を伸ばす研修とセットで、今の英語力で4技能を指導するための研修も行うとよいと思います。実際、教員は、自身の英語力不足に悩むとともに、「話す力」「書く力」の指導法を知りたいと思っています(図2)。

図2 受けた研修 (中学校教員)

「話す力」の指導方法	58.0%
「書く力」の指導方法	53.5%
技能統合型の指導方法	52.3%
言語活動の進め方	46.7%
教科書の活用方法	44.0%

\*複数回答。上位5項目を抜粋。  
出典/ベネッセ教育総合研究所「中高の英語指導に関する実態調査 2015」

い時にはどうすればよいのか、褒める時や励ます時にどのようなコメントがふさわしいか、生徒の英語力が上がってきたら、どのような言い返しにすると生徒は手応えを感じられるかなど、場面に応じて使い分けられるような研修を行えば、今の英語力でも指導の幅は広がられます。

教科書を十分に活用しているかも問いかけてみてください。教科書には、書く活動や話す活動を行うページがあります。それに則して進めれば、指導のポイントをつかめるようになるでしょう。

今後の課題として、授業を変えるのであれば、予習や復習との整合性にも目を向けてほしいと思います。単語調べや英文和訳ばかりでなく、言語活動主体の授業を行うなら、活動で何を話すのかを考えたり、教科書のトピックスに関連する事項を調べたりという課題の方が、授業を活性化させるのではないのでしょうか。

また、授業を変えるのなら、定期考査などのテストも、授業でねらったことを評価する内容に変える必要があるでしょう。それについては次号でお話ししたいと思います。

### 根岸先生からの提言

1. 生徒一人ひとりが、アクティブに英語で言語処理を行う授業になっているかを見直す。
2. 間違っても、たどたどしくてもよいから、「書く」「話す」量を増やす。
3. 教科書にある、書く活動や話す活動のページを十分に活用する。

## Reader's VIEW

## 2016 Vol.1 特集「学習態度の改善を『主体的な学び』につなぐには」へのご意見

このコーナーでは、編集部寄せられた読者の先生方からのご意見をご紹介します。

\*『VIEW21』教育委員会版のバックナンバーは「ベネッセ教育総合研究所」ウェブサイト (<http://berd.benesse.jp/>) でご覧いただけます。

◎探究型の学習が奨励されていますが、第1特集5ページのデータのように、子どもたちが従来型の指導を否定しているわけではないという事実にも目を向けるべきだと思います。身につけさせたい事柄に応じた使い分けこそが重要で、表面的な言葉遊びに終始させてはいけないことを、子どもたちが教えてくれたように感じました。(兵庫県)

◎第1特集の座談会で述べられていた「指導の標準化」に大いに共感しました。前任校では、校務改革の一環として、授業のスタンダードを明確にし、転任者も含めた全教員が、年度当初から共通して指導に取り組めるようにしました。それらの取り組みを通して、児童も教員も安定した学校生活を送ることができるようになったと思います。(熊本県)

◎子どもたちの主体的な学びを進めていくために、「分かったふりをせず、『分からない』と言える子どもを育てる」ことに共感します。分からないまま、授業に参加しているふりをしているから、ますます分からなくなる。ただ、これには教員側の見取りや、学級全体の受け入れ態勢、時間の確保などの課題があり、これらの課題にどこから取り組むべきか、じっくり見極める必要があります。(広島県)

◎第1特集の「座談会を終えて」にあった「地域として育成したい人物像の明確化」という言葉が新鮮でした。小中連携が叫ばれるようになってから、学力や体力の向上などで共通の取り組みを行ってきましたが、育成したい人物像の共有はあまり考えたことがありませんでした。(東京都)

◎小規模校では、活動の規模が小さくなる、アイデアを展開させにくいなどの課題ばかりが目立ちがちです。それらを、タブレット端末を用いた学校間連携によって打開しようとする、第2特集で紹介された新潟県南魚沼市の発想は、新鮮な発見でした。今後も実践を続けて、データを蓄積してほしいと思います。(新潟県)

◎第2特集で「5年先に行く」と言い切る岐阜県岐阜市には、戦略と戦術が確立し、勇気と努力があってこそその言葉だと感銘を受けました。また、長良川学園のインプットを重視した上でアウトプットの質を高めるという手法は、まさに英語教育の目指す姿だと思いました。(千葉県)

◎岐阜市の事例にあった「アゴラ」のようなスペースは、以前から学校独自の施設として空きスペースがあれば設営されていたと思いますが、行政が全校に整備すると宣言した姿勢が素晴らしいと思います。宝の持ち腐れにならないような運用が学校に委ねられており、どのような発展があるのか、今後に期待したいです。(愛知県)

◎大きな自治体と比べて、小さな自治体がすべて不利だとは言えません。小さいからこそ、住民の声を生かし、人と人との結びつきを大切にできる取り組みができるのです。地方創生が叫ばれる中、大切なのは我が町村のよさをいかに理解し、活用するか。本気で考えれば知恵はおのずと出てくることを、「小さな教委の大きな挑戦」から感じました。(岡山県)

◎「5年後の英語教育」の記事で、「教員の英語力＝指導力ではない」という言葉に共感しました。プロ野球の世界でも、名選手が名監督とは限りません。大事なのは「教える方」。そこを勘違いして、「発音ができないから」「英語が苦手だから」と尻込みするのではなく、たどたどしくてもよいから教員自身がどんどん話していくことが、小学校段階では大切だと思います。若手からベテランまで、どの教員も英語の授業ができる必要があるのです。(兵庫県)

◎英語力を把握するための方法として、CAN-DOリストがあります。「5年後の英語教育」の中に書かれていた、CAN-DOリストが「TO-DOリスト」や「WISHリスト」になっていないか再確認が必要という提言は、真の英語力を高める上で大切なことだと痛感しました。(青森県)

## 編集後記

第1特集で取り上げたプログラミング教育で古河市立大和田小学校を取材したのは、ちょうど小学校のプログラミング教育必修化に向けて、文部科学省で有識者会議が行われた時期でした。会議では、「コーディングスキル(プログラミング言語の使い方)ではなく、『プログラミング的思考』を身につけることが大切」と語られていましたが、同校でもコーディングスキルではなく、思考力育成に重点が置かれていました。これをどう「プログラミング的思考」につなげるか、今後が楽しみです。(岡本)

## VIEW21 教育委員会版 2016 Vol.2 2016年7月15日発行/通巻第6号

発行人 山崎昌樹  
編集人 春名啓紀  
発行所 (株)ベネッセコーポレーション  
ベネッセ教育総合研究所  
印刷製本 凸版印刷(株)  
編集協力 (有)ベンダコ  
執筆協力 中丸満、二宮良太、長谷川敦  
撮影協力 荒川潤、谷口哲、ヤマグチイキ

◎お問い合わせ先  
フリーダイヤル 0120-350455  
〒700-8686  
岡山市北区南方3-7-17